

---

# 謎を求めて…

紅佐洲仮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

謎を求めて：

### 【Nコード】

N9662H

### 【作者名】

紅佐洲仮

### 【あらすじ】

黒の組織の一員である間宮麗子の死亡。組織に近づくチャンスを失った。しかし、倉庫の中から間宮麗子が持っていたと思われるケースが見つかる。そのケースにはエンブレムが刻まれていた。コナン、警察、FBIはそれが何なのかを調べ始める。そのエンブレムの正体が分かった時、哀の体に異変が！。更に、組織の銃弾が哀を襲う。組織との戦い長期シリーズ第3部！

## 第0章 くプロローグく (前書き)

こんにちは紅佐洲仮です。

組織との戦い長期シリーズ第3弾。

今回は間宮麗子の死亡直後から始まります。

では、これからよろしくお願いします。

## 第0章 くプロローグく

間宮麗子の部屋のドアが静かに開いてジンとウォッカが部屋に入ってきた。

「此処がギムレットが借りていた部屋ですかい？」  
ウォッカは部屋の中を見渡した。部屋の中は掃除されているかの様に綺麗だった。

「ギムレットがあのか会社に潜入する為に借りていた場所だ。」  
ジンが言う『あのか会社』とは守屋財閥の事だ。間宮麗子は守屋財閥の会長、守屋繁宏を船上パーティーで殺した。しかし、その事件にFBIが動いてる事が分かり、組織は間宮麗子がFBIに捕まる前に始末をした。

「∴警察が来る前に組織に関する情報は全て消せ。」

「了解。」

ジンの言葉を聞いてウォッカは早速、作業に取り掛かった。ウォッカは先ずは部屋にあったパソコンを起動させた。その間、ジンは注意深く辺りを見ながら部屋の中を歩き出した。

「！！」

部屋の中を注意深く見ながら歩いていた時、床に一枚の写真が落ち

ている事にジンが気付いた。ジンは立ち止まり、写真を手に取った。

「…何かありやしたか？」

ウォッカはジンが立ち止まってる事に気付いて尋ねた。

「いや…、何でもねえ。」

ジンはウォッカに気付かれない様に写真をポケットに入れた。

「組織の情報は消したのか？」

写真をポケットに入れてからウォッカに尋ねた。

「たった今、終わりやした。」

ウォッカの言葉を聞いてジンは部屋のドアに向かって歩き出した。

「ずらかるぞ…。」

ウォッカはジンのあとに続いて歩き出し、部屋から出て行った。

## 第1章　（残骸）

倉庫の内部は爆発の衝撃で機械や機材など壊れて辺りには壊れた機械や機材などの残骸が散らばっていた。警視庁捜査一課の刑事達は倉庫の内部で捜査をしている。

「ふうー、何もないわね。」

佐藤は立ち上がりながら息を吐いた。佐藤の周りには残骸だらけで対した物はなかった。此処から事件に関する手掛かりを見つけるのには一日では無理だと彼女は内心思った。

「高木君、何か見つかった？」

佐藤は高木が居る方に視線を向けた。佐藤と高木の距離は少し離れているが、倉庫の中では声が響き大きな声を出さなくても聞こえる。

「こっちも何ありません。」

高木が立ち上がりながら答えた。高木の表情は少し疲労感が見えている。疲労感が見えるのは高木だけではない。倉庫の中に居る他の刑事達の表情は疲れた顔をしている。倉庫での捜査が始まって数時間が経っている。他の刑事達は疲れた顔はしてるが、手を休めたり、『疲れた』と言う言葉も発していない。高木は他の刑事達の様子を見て、自分も他の刑事達に負けない様に頑張らないといけないと思いい、再び作業に取り掛かった。

「あれ…?」

作業を取り掛かった高木はある物を見つけた。残骸と一緒に紛れ込んでいたのはトランクの様なケースだった。高木は残骸を退けてケースを手にとった。ケースは何処も壊れてなかった。高木はケースの中を開けた。ケースの中は空っぽだった。

「高木君、何か見つかったの?」

佐藤が高木に近づきながら尋ねた。

「これを見つけたんです。」

佐藤が近付いて来るのを確認した高木はケースを佐藤に見せた。ケースを佐藤に渡すと、佐藤は少し不思議そうにケースを見てからケースを開けた。

「何もないわね…。」

期待してケースを開けたが中に何もなかった事に佐藤は落胆した。その様子に気付いた他の刑事達も高木と佐藤に近付いて来た。

「一応、目暮警部に見せますか?」

嶋村が開いたケースを見ながら佐藤に尋ねた。

「そうね。」

佐藤は少し考えてから答えた。そして、開けていたケースを閉じて倉庫の出口に向かって歩き出した。高木と嶋村も出口に向かって歩き出した。残骸が多くて歩きづらく、近くに見える出口が少し遠く感じながら佐藤は歩いていた。



## 第2章 くエンブレムく

倉庫の外には目暮が刑事と話していて、コナン、哀、博士、ジヨデイは目暮から少し離れた所に居た。倉庫の周囲も内部と一緒に刑事達が調べていた。

「目暮警部。」

目暮が捜査官と話している時、倉庫から佐藤、高木、嶋村が走って向かって来た。

「何か見つかったかね？」

目暮は走って近付いた来た佐藤達に尋ねた。

「…これを見つめました。」

佐藤は目暮に倉庫の中で見つけたケースを渡した。コナン達も目暮に近付いてケースを見た。目暮は注意深くケースを観察した後、ケースの中を開けた。しかし、ケースの中に何も入っていない事に目暮は残念そうな顔をした。

「これを何処で見つけたんだね？」

目暮は開けたケースを閉じながら尋ねた。

「残骸の中に紛れ込んでいました。どうやら、それだけが壊れてなかったみたいです。」

ケースを最初に見つけた高木が目暮に報告した。

「（あれ？このケース、間宮麗子が持ってたケースに似てるな。）」  
コナンは間宮麗子が持っていたケースを思い出した。彼女も同じ様なケースを持っていて、その彼女が持つケースが開いた途端、爆発した。あのケースは開いた瞬間に爆発する仕組みになっていたんだろう。

「あれ、彼女が持っていたケースよね？」  
ジョディが目暮達に聞こえない様にコナンに尋ねた。

「そうだと思うよ。」  
コナンはケースをじっと見ながら答えたその時、コナンはケースに何か刻まれているのに気付いた。

「ねえ、ケースに小さく何かが刻まれているよ。」  
コナンはケースを指差しながら目暮達に伝えた。

「え？」

目暮達にケースをもう一度確認した。すると、ケースのロック部分の近くに小さく何かが刻まれていた。刻まれているのは文字だった。

「K…。」

佐藤は小さく刻まれた文字を見ながらぽつりと答えた。

「Kの文字が刻まれてますね。」

佐藤の横に居る高木はケースに刻まれた文字を見ながら答えた。

「何故、Kの文字が刻まっているんだ。」

目暮は腕を組みながら考えた。高木や佐藤も刻まれた文字がどんな意味があるのか考え出した。

「もしかしたら…、エンブレムじゃないですか？」

目暮達が考えている時、嶋村が口を開いて答えた。

「エンブレムってシンボルの事よね。」

コナンの横に居る哀が目暮達の話を聞きながら答えた。

「嶋村君、どうしてこれがエンブレムだと思うの？」

佐藤は嶋村が出した答えの理由を知る為に尋ねた。

「何となく思った事なんですけど、このケースに刻まれた文字はこのケースを作った場所やこのケースが使われている場所やこのケースの持ち主のシンボルマークかなって思っただけです。」

嶋村は自分が出した答えに自信が余りなくて、言葉を考えながら答えた。

「まだ、結論を出すのは早い。このケースに刻まれた文字が事件に関係があるのかを調べてからだ。」

「そのケースを見つけた時、ケースは開いてたの？」

目暮が言い終えると、コナンは目暮達に尋ねた。

「いや、閉じてあったよ。」

コナンの質問に高木真っ先に答えた。

「そうなんだ。」

コナンが一言そう言い終わると、目暮の携帯が鳴った。目暮はポケットから携帯を出して電話に出た。

「目暮だ…。」

目暮は電話に出て、電話相手に言った。

『目暮警部、千葉です。』

電話相手は千葉からだった。

「何かあったかね？」

『間宮麗子さんの部屋を調べましたが、事件に関する物はありませんでした。』

千葉が居る場所は間宮麗子が借りていたマンションだ。

『…それと、部屋にあったパソコンのデータが全部消えていました。

」

「なに！パソコンのデータが消えていた。」

千葉の報告を黙って聞いていた目暮が声を上げながら言った。その声は近くに居た佐藤やコナン達にも聞こえていた。目暮の言葉にコナンと哀は凄く敏感に反応した。

『どうします？警部…。』

「もう少し調べてくれ。また、何か分かったら連絡をするんだ。」  
千葉にそう言い終えると、目暮は電話を切った。

「パソコンのデータが消えてる事はその中に警察に知られたくない何かがあった訳ですかね？」

目暮が電話を切ったのを確認してから佐藤が口を開いた。

「…かも知れんな。」

目暮は一言ぽつりと呟きながら携帯をポケットに入れた。

### 第3章 〈日常に戻る〉

「でも、残念ね…。」

ビートルの助手席に座る哀が口を開いた。先程、目暮から『聞きたい事があったら後日連絡する』と言われコナン達は帰路につく事にした。ジョディとは倉庫で別れた。

「何が残念なんじゃ？」

ビートルを運転する博士が哀が言った意味が理解出来なかった。

「パソコンのデータが消えていた事よ。データが消えて無かったら彼等の情報が少しだけでも入って来たかも知れないでしょ。」

14

「確かにそうじゃの。」

博士は哀の言葉を聞いて納得した様な顔をしている。

「ん…、じゃあパソコンのデータを消したのはまさか…。」

「彼等だと思っわ。警察やFBIに調べられる前に先手を打ったの

よ。」

哀の言葉を聞いて博士は自分がさっき思った事が的中して何か恐怖感を覚えた。

「まあ、今回はチャンスが無かったと思って諦めるのね：工藤君。」  
哀はそう言いながら後ろを振り向いた。ビートルの後部座席には真剣な顔つきでコナンが何かを考えている。

「どうしたの…？」

哀はコナンが何かを考えている事に気付き、コナンに尋ねた。

「いや…、何でもねえ。」

コナンは少し間を空けてから答えた。哀は数秒ぐらいコナンをじっと見つめた後、前を向いた。



「ただいま…。」

博士のビートルで探偵事務所に帰って来たコナンは何時もの声と何時もの表情で事務所のドアを開けた。事務所のドアを開けると、蘭の姿はなかったが小五郎が机に顔を伏せながら寝ていた。事務所の中は小五郎が見ていたと思われるテレビの音だけが聞こえる。

「（…まったく、寝るならテレビぐらい消せよな。）」

コナンは小五郎が寝ている机に置いてあるテレビのリモコンを手に取り、テレビの電源を切った。テレビの音が消えると事務所の中は一瞬でも静かになった。聞こえるのは車の騒音などだけだった。

「ただいま。あれ、コナン君帰ってたんだ。」

コナンがテレビのリモコンを元の場所に戻した時、事務所のドアが開いて買い物袋を持った蘭が帰って来た。

「蘭姉ちゃんは買い物に行ってたんだね。」

コナンは買い物袋を持った蘭を見ながら答えた。

「うん、そうだよ。今日はお鍋にするから材料を買って来たんだ。」  
蘭は手に持っていた買い物袋を少し上に上げながら言った。買い物

袋には鍋に使う材料が入ってる様だ。

「：何だ、帰ってたのか。」

小五郎は机から少し顔を上げながら答えた。言い終えると、小五郎は大きな欠伸をした。

「じゃあ、夕飯な支度してくるね。」

蘭はそう言い終えると、事務所を出て三階にある自宅に向かって行った。

「あゝ！もうこんな時間か。」

小五郎は事務所にある時計を見ながら叫んだ。その声は近くに居たコナンにはうるさい程聞こえて来た。

「ヨーコちゃんが出る番組が始まるじゃねえか。」

小五郎は慌てて机に置かれているテレビリモコンを手に取り、テレビの電源を入れた。テレビの電源が入ると沖野ヨーコの画面に映った。

「ヨーコちゃん。」

小五郎は沖野ヨーコが出て来て嬉しそうな顔をしながら叫んだ。

「（ハハ…、本当に好きだねヨーコちゃん。）」  
コナンは苦笑いをしてソファアに座った。

## 第4章 〈子供の声〉

「あの倉庫で見つかったのはケースだけ、部屋からはパソコンのデータが消えていた…。」

目暮の机には間宮麗子の事件の報告書が置かれている。目暮は唸りながら報告書とにらめっこしている。

「倉庫で見つかったケースが何か事件と関わりがあるんじゃないでしょうか？刻まれていた文字も気になりますし…。」

高木が目暮の居る場所に近付いて来て答えた。

「あのKの文字か…。」

高木が発した言葉を聞きながら目暮がぽつりと口を開いた。

「今、あのケースは調べてもらってます。その文字も直ぐに分かる筈です。」

白鳥が資料を持ちながら目暮と高木に近付いて来た。

「…自殺でしょうか？」

高木は少し声のトーンを下げながら尋ねた。

「まだ、分かんよ。」

「自殺ではないと思います。」

目暮が答えた直後、嶋村が目暮達に近付きながら答えた。

「どうしてそう思うんだね？」

目暮は嶋村が何故、そう断言するのか尋ねた。

「部屋のパソコンのデータが消えていた事です。自殺する人間がそんな事をしますか？パソコンのデータを消したのは間宮麗子を殺した人間でその中に犯人にとって知られたくない何かがあったんじゃないんでしょうか？」

「確かに嶋村君が言った可能性はあるが、自殺する時に全てを消し去ろうとパソコンのデータを消したとも考えられないかね？」

目暮は嶋村の話を黙って聞いた後、ゆっくり口を開いて答えた。

「し、しかし…。」

「嶋村君、そんなに早く結論を出してもミスが起こる。確実に慎重に捜査をして真実を導き出すんだ。」

目暮は理解を求める様に嶋村に言った。

「…分かりました。」

嶋村は少し俯きながら答えると、目暮達から離れて行って自分の席に戻って行った。

「彼は熱心に事件に取り組みますね。」

嶋村が席に戻ってたのを確認してから白鳥が答えた。

「…そうだな。」

目暮はさりと一言だけ答えた。

「蘭姉ちゃん、ちょっと出掛けて来るね。」

翌日、朝を迎えて日が昇り始めて人が活発に動き出した頃、事務所に居る蘭に言った。

「こんな朝早くから？」 蘭は朝早くから出掛けるコナンを心配そうに尋ねた。

「うん。でも、夕方には帰って来るから心配しないで。」  
コナンはそう言い終えると、事務所のドアを開けて事務所から出て行った。

「もう、何処に行くかぐらい言って行けば良いのに……。」  
事務所のドアが閉まってから蘭は少し文句を口走った。

「ガキは良いよな…、遊びが仕事みたいなもんだからな。」  
小五郎が新聞を見ながら呟いた。

「最近、依頼ないしね。」

小五郎が言った言葉を聞いて蘭が答えた。その言葉を聞いて小五郎は少し退屈そうな表情をしている。

ピンポン…、

その時、探偵事務所のインターホンが鳴った。

「もしかして、依頼かもね。」

蘭は小五郎にそう言い終えると、事務所のドアノブに手をかけた。その言葉を聞いた小五郎の顔は退屈そうな顔から期待する顔に変わった。

「あれ、今日はどうしたの？」

事務所のドアを開けた蘭の表情が笑顔に変わった。表情が笑顔に変わった訳は事務所の前に歩美、光彦、元太が立っていた。

「蘭お姉さんこんにちは、コナン君居ますか？」

最初に口を開いたのは歩美だった。事務所に来たのが歩美達だと分かった小五郎は依頼人が来たと期待していたが、表情がまた退屈そ



うな顔に戻った。

「ごめんね。コナン君、さっき出掛けちゃったのよ。」  
蘭は両手を合わせながら歩美達に謝った。

「もしかして、博士の家に行っただんですかね？」  
次に口を開いたのは光彦だった。

「哀ちゃんも誘うつもりだったし博士の家に行ってみよう。」

「じゃあ、早く行こうぜ。」  
歩美の言葉を聞いて元太が急かす様に言った。歩美、光彦、元太は階段を降りて博士の家に向かって行った。

## 第5章 〈刻まれた文字の謎〉

ピンポーン…

博士の家に着いた歩美達は博士の家のインターホンを押した。インターホンを押してから一分もせずにドアが開いた。

「おや？今日はどうしたんだね？」

ドアが開くと博士が家から顔を出して尋ねた。

「博士、こんにちは。哀ちゃん家に居る？」

「哀君なら居るぞ。とにかく、中へ入ったらどうじゃ？」

博士がそう言い終えると、歩美達は『おじやます。』と大きな声で言いながら家の中に入った。家の中に入ると哀がソファアに座って雑誌を読んでいた。

「あら、今日はどうしたの？」

歩美達が来たのを確認した哀が雑誌をテーブルに置き、ソファアか

ら立ち上がった。

「今から公園で遊ぶ事になりました灰原さんを誘いに来たんです。」  
哀の問い掛けに光彦が答えた。

「良いわね公園、ちょうど暇だったし…。」  
哀は歩美達に近づきながら答えた。

「じゃあ、決まりだね。」  
歩美が嬉しそうに言った。

「そういえば、コナン君の姿がありませんね。」  
光彦は家の中を見渡した。だが、コナンの姿は何処にもなかった。

「てっきり、此処に来てると思ったんだけどな…。」  
光彦が言い終えるたあと、元太がぼつりと答えた。

「江戸川君がどうかしたの？」

哀が話しに入って尋ねた。

「此処に来る前にコナン君の所に行っただけど、出掛けてるって言うってたの。」

「だから、此処に居ると思ったんです。」  
歩美の次に光彦が哀の質問に答えた。

「そういえば、今日は来てないのう…。」  
博士は今日、コナンの姿を見てない事に気付いて答えた。

「はい、鍵ありがとね。」  
コナンは持っていた鍵を渡した。コナンが今、居る場所は間宮麗子

が住んでいたマンションだ。

「…もう良いのかね？」

コナンから鍵を渡された人はマンションの管理人だった。

「うん。やっぱり警察が部屋の中の物は持って行ったみたいだね。」  
コナンは笑顔を浮かべながら答えた。

「慌ただしく動いていたからね。」

管理人の男性は鍵をポケットに入れながら答えた。

「ねえ、管理人さんは間宮麗子さんからKって関する言葉とか単語とか聞いてない？」

コナンは話しを変えて管理人に尋ねた。

「K…、聞いた事がないな。それが、何かあるのかね？」  
管理人は少し考えた後、逆にコナンに尋ねて来た。

「あ、知らないなら気にしないで……。」  
コナンはそう言い終えると、マンションから出て行った。マンションを出たコナンは立ち止まった。

「（……何も手掛かりはなかったな。）」  
コナンはマンションの方を振り返り、ため息をついた。コナンは少し期待をしていた。間宮麗子のマンションに来てみたら何か見つかるかもしれないという期待感があったが、何も手に入れる事が出来なくて少し後悔をした。

「（やっぱり……、ケースに刻まれたKの意味を解かなきゃダメか。）」  
コナンはケースに刻まれた文字の事を考え出した。

「（けど、ケースに刻まれたKって何だ？エンブレムだとしても何を意味してるんだ？）」  
コナンはゆっくり歩きだし、考えながらマンションから少しずつ離れて行った。

「……………」  
マンションの近くの壁に隠れながらコナンの様子を嶋村が見ていた。嶋村はマンションから出て来たコナンの姿を見ていた。コナンがマンションから離れて行ったのを確認してから隠れていた場所から出

て来て、マンションの方をじっと見つめた。

## 第6章 く使われていないケースく

「ジャンケン…ポン」

米花公園に哀達が来ていた。話し合って哀達はかくれんぼする事になった。

「元太君の負けです。」

ジャンケンの結果、元太が負けてしまった。元太は自分が負けた事が少しショックだった。

「じゃあ、100まで数えて下さい。」

光彦がそう言い終えると、哀、歩美、光彦達は公園内に散らばってかくれんぼが始まった。

「分かったよ。1…、2…、3…。」

元太はゆっくりと100までの数字を数え出した。



間宮麗子が住んでいたマンションを出たコナンは次に何処に行くか考えながら歩いていた。コナンが考えながら歩いていると、ポケット入れている携帯が鳴った。コナンは立ち止まり、ポケットから携帯を出して電話に出た。

「はい、もしもし。」

コナンは電話に出て、電話相手にそう言った。

『クールキッド、ジョディよ。』

電話の相手はジョディからだった。

「どうしたの？ジョディ先生。」

コナンはジョディが何故、電話をして来たのか尋ねた。

『倉庫で見つかったケースの事で分かった事があるのよ。』

「もしかして、ケースに刻まれた文字が分かったの？」  
ジョディの言葉を聞いてコナンは期待をしながら声のトーンが上がった。

『文字の事じゃないわ…。』

電話越しから聞こえて来た言葉は期待していたものとは違い、コナンは少し残念そうな顔をした。

『あのケース、どうやら5年前から製造されていないみたいなのよ。』

「どういう事…？」

ジョディから知らされた情報はケースが作られていない事だ。コナンは詳しく聞くためにジョディに尋ねた。

『私もあのケースが気になって調べたのよ。そうしたら、あのケースは今では作られていない事が分かったのよ。』  
ジョディはさっきより詳しく話し出した。

『今は新しいケースが作られていてその古いケースはもうないのよ。』

「つまり、倉庫で見つけたのはケースは古いケースで今は作られていないケースなんだね？」

コナンは確かめる様にジョディに尋ねた。

『そうよ…。あ、それと刻まれた文字の事なんだけど…。』  
ジョディは何かを思い出しながら話しを変えて答え出した。

「やっぱり何か分かったの？」  
コナンは再び期待感が湧いて来た。期待感を表情出さない様に尋ねた。

『文字の意味は分からないけど…、あのエンブレムは何処かの会社のマークよ。』

「（会社のマーク…。）」

コナンはケースのエンブレムを思い出していた。

「じゃあ、あのKの文字は会社の名前ってこと？」

あのエンブレムが会社のマークなら刻まれた文字は会社の名前になる。コナンはそう考えた。

『たぶん…、そうだと思うわ。一応、その会社を探してみるけど、見つかるかは分からないわ。』

「こっちも何か分かったら連絡するね。」

コナンはそう言い終えると、電話を切った。電話を切り、携帯をポケットに入れた。

「（5年前から作られなくなったケース…、それがなんであの倉庫に？あのエンブレムが会社のマークならKは会社の名前だけど…、Kの付く会社の名前は沢山ある。」）

コナンは携帯をポケットに入れて再び歩き出した。

「（どうやって探す？）」

コナンは歩きながら深く考え出した。ケースに刻まれたヒントの答

えを導き出す為に…。

「光彦、見つけたぞ。」

元太は勝利の声を出した。光彦はゆっくり隠れた場所から出て来た。隠れていた場所から出て来ると、既に哀と歩美が見つかった。

「二人とも先に見つかってたんですね。」

哀と歩美の姿を確認しながら口を開いた。

「よし、もう一回するぞ。」

元太は声を上げながら言った。

「じゃあ、もう一回しますか。」

光彦がそう言い終えると、哀達はジャンケンをする準備を始めた。

## 第7章 〈会社名〉

「そうか…。あのケースは5年前から製造されていないのか。」  
コナンがジョディからケースの事で聞かされた頃、警視庁捜査一課も同じ情報を手に入れていた。

「今は新しいケースが使われています。」  
高木は調べて来た情報を目暮に報告した。

「じゃあ、使われなくなったケースが倉庫で見つかったわけ？」  
佐藤が腕を組みながら高木が調べて来た情報を確認する様に尋ねた。

「はい…。」

「あのエンブレムの方は何か分かったかね？」  
目暮は話しを変えて高木に尋ねた。

「エンブレムはどうやら会社のマークだそうです。」  
目暮の質問に高木が真剣な表情で答えている。

「会社のマーク…？」

高木から出た言葉に目暮は首を傾げた。

「会社を示すマークの事です。」

目暮が分からなそうな表情をしているので佐藤が分かる様に答えた。

「じゃあ、あのエンブレムは会社のマークという事か…。」

目暮は椅子にもたれ掛かりながら呟いた。

「それと、ケースに刻まれていたKの文字の事ですが…。」

「あの文字が分かったの？」

高木の横に居た佐藤がさっきより声のトーンが上がった。

「いえ…、あの文字は分かりませんが…少しだけ分かりました。」

高木はそう言い終えると、手に持っていた資料を目暮に渡した。



「これは…何だね？」

目暮は資料を受け取り、資料に視線を落としながら尋ねた。

「あのケースを使っていた会社の名前です。」

目暮が受け取った資料には100社以上の会社の名前が資料に載っていた。

「つまり、Kの文字は会社の名前って事ね。」

佐藤は目暮が受け取った資料を見ながら答えた。

「しかし…、ケースを使っていた会社は結構あるな。」

目暮は資料に書かれた会社の名前を一つ一つ見ながら答えた。

空が茜色に染まり、夕日が沈み始めた頃、公園には昼の時よりも人の数が減った。公園の外の道は会社帰りの人や部活帰りの人達が家に帰ろうとしている。

「そろそろ、帰りますか？」

光彦は時計を見ながら尋ねた。

「そうだね。もう帰らないと怒られるし…。」

次に歩美が口を開いて帰る事に決めた。元太はお腹を抑えながら早く帰りたい様子だ。お腹を抑えてるのはどうやらお腹が減った様だ。その後、哀達は帰る事にして公園から出て行った。

夕方になり、コナンは探偵事務所に戻って来た。事務所に戻ると蘭が夕飯を作っていた。小五郎はテレビでニュースを見ていた。

「コナン君、もうすぐご飯だから手を洗って来てね。」  
台所から夕飯を作る蘭の声が聞こえて来た。

「はい。」

コナンは元気良く返事をして洗面所に手を洗いに行った。コナンが手を洗いに行ってる間に蘭は夕飯の支度ができ、テーブルに箸や皿などを置き、夕飯を食べる準備が出来た。

## 第8章 〈危険なまね〉

それから二日後…、コナンは眠そうな顔をしながら帝丹小学校の廊下を歩いていた。廊下を歩き続けると『一年B組』の教室が見えて来た。コナンは『一年B組』の教室のドアを開き中に入った。

「あ、コナン君おはよう。」

コナンが教室に入って来たのを最初に見つけたのは歩美だった。その後、光彦と元太がコナンに挨拶した。コナンは自分の席に着くと、ランドセルを机の上に置き、椅子に座った。椅子に座った瞬間、大きなあくびをした。

あくびの原因は昨日、夜遅くまで読んでいた小説だろう。

この前買った推理小説にはまり、最近はその小説を読む時間が多くなった。

家に居る時は良くその小説を読んでいる。

その小説を読んでいた時、一度だけ蘭に尋ねられた。『面白いの?』  
って…。コナンは凄く面白いと言ったが、彼女に『違う本も読んでみたら?』と言われた。コナンは昨日の夜を最後にあの小説を読む事を諦めた。だが、推理小説なら他にもある。また、今度探しに行こうとコナンはふっと考えながらランドセルから教科書を取り出した。

「また、血生臭い小説でも読んでたのかしら?」

コナンの横の席に座る哀から皮肉っぽく尋ねられた。

「まあな…。」

「…で、何か分かったの？」

哀が突然、話しを変えてコナンに尋ねて来た。

「何の事だ？」

コナンは急に哀から尋ねられても何の事か分からなかった。

「間宮麗子の事よ。貴方…、何かを調べてるみたいけど。」

哀から出た言葉は事件の事だった。どうやら、哀はコナンが何かを調べる事を知ってる様だ。

「いや…、何も分かってねえ。」

「本当に何も分かってないの？」

哀はコナンにもう一度、尋ねた。彼なら何か分かってる筈。哀はそんな気がした。

「ああ…。」

コナンは一言だけそう答えた。コナンの口からは事件の話を聞く事は無理だと哀は思った。

「まあ、貴方が何しようかは自由だけど…火の粉を飛ばす様な危険な真似はしないでよ。」

哀はコナンに忠告した。彼が危険な事に首を突っ込むのは良く知ってる。それで、命を落とす事になる時だってある。

「分かってるよ…。」

コナンは少し面倒そうに答えた。

「ケースに刻まれた文字は会社名か…。」

都内を走るベンツに運転席にジェイムズ、助手席にジョディが座っている。ジョディはジェイムズに倉庫で見つけたケースの事、エンブレムの事、刻まれた文字の事をジェイムズに話した。

「ええ…。ですが、そのケースを使ってた会社は沢山あります。」

「そこから探すのは大変だな。」

ジェイムズは表情を一つも変える事なくベンツを運転しながら口を開いた。

「しかも、そのケースは5年前から製造されていません。」  
ジョディは調べて来た情報をジェイムズに話した。

「そういえば、間宮麗子もケースを持ってたな。」  
ジェイムズは間宮麗子がケースを持っていた事を思い出した。

「そのケースが彼女が持っていたケースと似てるんです。」

「しかし、そのケースに刻まれた文字の会社と組織とは関係がないんじゃないのか？」

倉庫で見つけたケースが間宮麗子が持っていたケースに似てるだけで組織が絡んではジエイムズには思えなかった。

「…ですが、倉庫で見つけたケースが間宮麗子が置いた物だとして組織と何らかの関係が出て来ると思うんですが…。」

ジョディは少し真剣な顔付きでジエイムズに訴えた。

「その可能性はゼロじゃないな…。しかし、警察も動いてるだろう？」

「ええ…。警察が何処まで掘りだせるかは分かりませんが…。」

ジョディは腕を組みながらジエイムズの質問に答えた。

「…調べるのなら慎重にやってくれ。」

FBIが日本で組織を追ってるのは極秘捜査だ。もし、FBIが日本で捜査してる事がばれたら組織の事も話さなければならぬ。

ジエイムズはその事をばれない様にジョディに忠告した。



## 第9章 〈秘密主義者〉

「はぁ？天体観測…？」

1時間目の授業が終わった途端、歩美と光彦と元太がコナンの席に集まって来た。

「今度の休日に天体観測に行くんです。」

光彦が休日の目的を話し出した。

「天体観測のレポートの宿題が出たでしょう？だから、皆でやろう  
思っ…。」

コナンは歩美の言葉で天体観測のレポートの宿題を思い出した。確かにこの前、小林先生がそんな事を言っただのを急に思い出した。

「けど、行くなら博士に相談しなきゃならねえだろう？」

「それは今日の帰りに博士の家に寄って相談するんです。」  
コナンの質問に光彦が答えた。

「哀ちゃん、良いよね？」

歩美は一番良い笑顔を哀に向けながら尋ねた。

「ええ…、良いわよ。」

哀は迷う事なく了承した。

「…ったく。」

コナンは面倒そうな声を出しながら口を開いた。

「どうして、あの女にギムレットを始末させたの？」

ポルシェの後部座席で脚を組みながらベルモットが座っている。ベルモットの表情は何時もより真剣な顔付きをしている。

「…命令を出したのはあの方だ。従うのが当然だろう。」  
ポルシェの助手席に煙草を吸ってるジンが座っている。ウオッカは  
ジンとベルモットのやり取りを黙って聞いている。

「始末するぐらいなら他の人でも良かった筈よね？」

「どうした、ベルモット？やけにあいつの事を気にしてるな。」  
ジンは何故、ベルモットがそこまで気にするのか分からなかった。

「嫌いなよ。彼女がね…。」  
ベルモットはジンの問い掛けに迷う事なく答えた。ジンとベルモッ  
トの口から出て来た人物の事は組織の人間で知らない人はほとんど  
居ない。ウオッカもその人物を知っている。しかし、嫌いつて聞い  
たのは初めてだった。

「…あいつも秘密主義者だからか？」  
ベルモットの言葉から数秒ぐらい間を空けてからジンは口を開いた。

「さあ…、どうかしら？」  
ベルモットは言い終えると、窓の方を見た。まだ、外は寒い。街を歩く人達は厚着やマフラーやコートや手袋などをしている。ベルモットはそんな様子を熱心な瞳で見続けていた。

「此処も違ったか…。」

高木は持っている紙に書かれた会社名をボールペンで消した。高木の横には嶋村も居る。高木と嶋村の背後には大きなビルが建っていた。高木と嶋村は先程までこのビルの会社に来ていた。エンブレムに刻まれた文字が会社名だと分かり、ケースを使っていた会社を片っ端から訪ねている。

「高木さん、次に行きますか？」

高木の横に居た嶋村が口を開いて尋ねて来た。

「ああ…。」

高木は資料を見ながら歩き出した。嶋村もそれに続いて歩き出した。

「今日はどれぐらい行けますかね？」

歩き出した途端、嶋村が口を開いた。資料には端から端まで会社名で埋めつくされている。嶋村の言葉で高木は『今日は何時ぐらいに帰れるだろうか？』と心配しながらため息が零れた。

「…行ける所まで行こう。」

これが捜査だと分かっているため息が出てしまった。疲れる事は覚悟の上、この事件が終わったらゆっくりすれば良い…、高木はそんな事を考えながら次の目的地に向かって歩き続けている。

## 第10章　く気になる事く

退屈な授業が終われば一日の授業が終わる。

学校の授業が終わったコナン達は博士の家に向かって歩いていった。コナンと哀の前を歩く歩美や光彦や元太は今日の学校での出来事や家に帰って見るテレビなどの話しをしていた。そんな、楽しく話しているとおつという間に博士の家が見えて来た。歩美や光彦や元太の歩くスピードが上がり、博士の家に着いた。

「おじゃまします。」

歩美達は元気良く博士の家のドアを開けた。歩美達の声を聞いて博士が優しい笑顔を向けながら出迎えてくれた。歩美達の後ろからコナンと哀も家の中に入った。

「皆、今日は学校帰りにどうしたんじゃない？」

博士は新作のゲームも作って無かったので歩美達が尋ねて来た理由が分からなかった。

「実はですね…、博士にお願いがあって来たんです。」  
光彦が改まって博士の質問に答えた。

「なんじゃ？お願いって…？」

「今度、宿題で天体観測のレポートを出さなきゃならなくなったの。それで、博士に今度の休日在天体観測に連れて行ってほしいの。」  
光彦の次に歩美が答えて、博士に事情を話した。

「…もちろん構わんぞ。」

博士は優しく了承してくれた。その言葉を聞いて歩美、元太、光彦は嬉しそうな顔をした。

「早速、計画を立てましょう。」

光彦がそう言うのと、歩美達はテーブルに向かい、天体観測の計画を考え出した。

「哀ちゃんも一緒に考えよう。」

歩美の言葉を聞いて哀は歩美達が居るテーブルに向かい、一緒に計画を考え出した。コナンはその様子をちらっと見た後、博士に近付いた。

「…大丈夫なのか？用事とかあったんじゃないのか？」

コナンは急な計画に了承した博士を少し心配した。

「大丈夫じゃよ…、その日は何もないわい。」

博士は心配するコナンに穏やかな表情をしながら答えた。

「博士が良いなら別に構わねえよ…。あ、そうだ…博士にちょっと頼みたい事があるんだ。」

コナンは急に何かを思い出しながら博士に言った。

「なんじゃ？頼みて…？」

博士がコナンに尋ねると、コナンは哀達の方をちらっと一瞬だけ見た。哀達はコナンに気付かず、天体観測の計画を話している。

「実は、博士に調べてほしい事があるんだ。」

コナンの表情が少し真剣な顔付きに変わった。

「調べてほしい事？」

博士が首を傾げながら尋ねた。



「倉庫で見つけたケースに文字が刻まれていたのは覚えてるよな？」

「確か…、Kの文字が刻まれていたんじゃないだろう？」  
博士は確認する様にコナンに尋ねた。

「ああ…。それで、調べてほしいのは刻まれていたKの文字の事なんだ。」

「じゃが…、そのKの意味が分からんと…。」  
博士は困った顔をしながら答えた。

「Kの意味は会社名だ。博士に調べてほしいのはKが示す会社だよ。」  
コナンは淡々と博士に話し出した。

「会社名？」  
博士はコナンが発した言葉に理解が出来ず、首を傾げた。

「あのケースを使っていた会社の名前だ。ケースは5年前から作られていないけどな。」

「じゃが新一君…、そんな事は警察が調べてるんじゃないのかね？わしに頼むより高木刑事に聞いた方が…。」  
博士はコナンの話を聞きながらふっと疑問に思った。警察も捜査をしている。コナンが自分に話した内容も警察ならもう掴んでる情報だ。

「…気になる事があるんだ。」

コナンは腕を組みながらゆっくり口を開いた。

「気になる事じゃと…？」

「倉庫で見つけたケースは5年前から作られなくなったケース。しかも、見つかったのは一つだけ…。」

コナンの表情はさっきよりも深刻な表情になった。

「偶然じゃないのかね？そこにケースがあつたのは…。」

博士は深刻な表情をするコナンを少し心配そうに見ながら答えた。

「倉庫の中は爆発の衝撃で残骸が散らばっていたのに、あのケースだけは無傷だった。しかも、残骸に隠れる様にあつた。」

「ど、どういう事じゃ…？」

話しを聞いている内に博士の表情も少し真剣な顔付きに変わった。

「考えられるのは二つ。」

コナンは少し顔を上げながら答えた。

「一つは間宮麗子があ倉庫に置いた可能性。彼女が何かをするために置いたのか…、もしくは何らかの理由で置いたのか…。」

「二つは誰かが意図的に置いた可能性だ。何のために置いたかは分からないが、意図的だとしたら…間宮麗子があ倉庫に来る事を知ってなければならぬ。そうすると、考えられるのは…奴等しかいねえんだよ。」

「な、なんじゃと！」

コナンの言葉から組織を連想する言葉が出て、博士は声を上げながら驚いた。博士の驚いた声は天体観測の計画を考えていた哀達にも聞こえて来た。

「どうしたんですか？博士…。」

「何かあったのか？」

「凄い声を出してたよ。」

博士を心配して光彦、元太、歩美が博士とコナンに近付いて来て尋ねた。

「大丈夫じゃよ。コナン君とこの前やっていたテレビの話をしていて驚いただけじゃよ。」

博士は歩美達を心配させない様に答えた。その言葉を聞いて歩美達は安心した様な顔をしてテーブルに戻っていた。

「…本当かね、その話し？」

歩美達がテーブルに戻ったのを確認してからコナンに尋ねた。

「まだ、確証はねえよ。けど、ケースに刻まれていた文字の会社がもしかしたら奴等と関わりを持ってる可能性はある。しかし、警察がその会社に現れたら奴等は必ず警戒する。だから、警察よりも早く見つけださなきゃならねえんだ。」

「分かった。その会社を探してみるが…、そんなに簡単には見つからんじやろう。」

博士はコナンの頼み事を聞いたが、期待する結果が出る可能性は少ない事をコナンに伝えた。

「それと…、この事は灰原には言わないでくれ。」  
コナンは哀の方をちらっと見た後、博士に伝えた。

「え、何故じゃ？」

博士は疑問に思いコナンに尋ねた。

「間宮麗子の事であいつ…、精神的に参ってる筈だ。あの事件から

日はまだ余り経っていないのに組織の話をしたら、更に精神的に不安定になるだろう？」

コナンはさっきの真剣な顔から穏やかな表情に変わりながら尋ねた。

「そうじゃの…。」

博士はコナンの言葉に納得した。

「あいつをこれ以上…不安にはさせらねえからな。」

## 第11章　　ノ難航ノ

「え？今度の休日に博士達と天体観測に行くの？」  
コナンは事務所に帰ってから早速、蘭に報告した。

「うん、学校の宿題で天体観測の宿題が出たんだ。それで、皆と相談して天体観測に行く事にしたんだ。」

コナンは蘭に納得してもらう為に天体観測に行く理由を話した。

「博士が良いって言ったのなら良いけど…、あんまり博士に心配かけちゃダメだよ。」

蘭は渋々、天体観測に行く事を許可をしてくれた。

「ありがと、蘭姉ちゃん。」

コナンはにっこり笑顔を浮かべながらお礼を言った。

それから三日後…、ケースを使ってた会社を一日一日訪ねてるが、刻まれていた文字の会社はまだ見つかってない。警視庁捜査一課の刑事達は少し苛立ちを立てていた。

「うーん、見つからんか…。」

捜査が始まってから重要な手掛かりや証拠は全く見つかってない。間宮麗子の死は自殺じゃないのか？と目暮は少しずつ考えていた。

「今、戻りました。」

その時、高木と嶋村が戻って来た。高木と嶋村は戻って来た途端、目暮の居る場所に向かった。

「どうだったんだね？今日もダメかね？」

目暮から出た言葉には期待する言葉はなかった。

「はい、今日も何もありませんでした。」

高木も嶋村も少し疲れた顔をしている。他の刑事達も疲れた顔をしている。この数日間は外で捜査をしていて疲れが溜まっている様だ。



「そうか…。」

目暮は一言だけぼつりと答えた。

博士は今日の朝から一日中パソコンを使っている。コナンに頼まれた事を調べる為にパソコンを操作をしている。しかし、たった一文字でその会社名を探すのは大変だとは分かっていたが…引き受けた事に博士は少し後悔をしながら大きなため息をついた。

「博士…。」

博士がため息をついた途端、背後から哀の声が聞こえて来た。

「あ、哀君…、どうしたんじゃない？」

背後に哀が居た事に気付かなかった博士は驚いた声が出してしまった。

「ちょっと買い物に行つて来るけど、何か必要な物とかない？」

哀は買い物に行く事を博士に伝えた。

「いや、何もないわい。」

「そう…。」

博士がそう言い終えると、哀は買い物に行くために玄関に向かって歩き出した。

「哀君、気を付けて行くんじゃないぞ。」

博士は哀を心配する様に言った。声も心配しているが、表情も心配している顔をしている。

「ええ…。」

哀はさらりと答えた後、玄関のドアを開けて外に出て行った。

## 第12章 天体観測へ…

天体観測当日、コナンは朝早く起きて博士の家に向かっていた。背中に背負うリュックは少し重く、眠たそうな顔をしながら歩いている。博士の家が見えて来ると、家の前に博士のビートルが止まっている。ビートル前には博士、哀、歩美、光彦、元太がコナンが来るのを待っていた。

「あ、コナン君来たよ。」

最初にコナンの姿を確認したのは歩美だった。コナンは哀達に近付いて立ち止まった。

「じゃあ、コナン君も来た事じゃし出発するか。」

博士の言葉を聞いて哀達はビートルに乗った。ビートルの後部座席には歩美、元太、光彦が乗り、助手席にはコナンと哀が乗った。最後に博士が運転席に乗り、ドアを閉めてビートルのエンジンをかけた。エンジンがかかり、ビートルを発進させた。

「もう出掛けたのか？」

小五郎は新聞を読みながらテレビを見ている。テレビでは情報番組をやっている。

「博士の家で集合する時間が早かったみたいだよ。」

蘭は事務所の中を掃除しながら答えた。

「ふーん。」

小五郎は表情を変える事なく、新聞を読みながらぼつりと呟いた。

都内を過ぎてから数時間が経った。辺りの景色は都会に住む自分が

余り見た事のない光景だ。前を見ると山が遠くに見えたり、横を見ると森林の風景が広がっていた。こんな光景は自分が住む場所では見られない絶景だとコナンはビートルの窓から外を見ながら思った。

「博士、まだかよ。」

ビートルの後部座席から元太の退屈そうな声が聞こえて来た。さっきまで、仮面ヤイバーやサッカーの話で盛り上がっていたが、ずっと車の中に居て退屈したのだろう。

「もうすぐじゃよ。」

博士が運転しながら答えた。どうやら今回は道に迷う事もなく、車が故障する事もなく目的地に着きそうだとコナンはふっと感じた。

「楽しみだね、天体観測。」

元太の横でワクワクそうに歩美が答えた。

「僕は今回、デジカメを持って来たんです。」

光彦はリュックからデジカメを取り出した。

「スゲー…。」

元太がデジカメを羨ましそうに見つめながら呟いた。

「あ、見えて来たわい。」

運転する博士が大きな声で口を開いた。博士がそう言うと、コナン達は辺りを見た。辺りには沢山のペンションが並び、ビートルの目の前に大きな駐車場が見えて来た。博士が運転するビートルは駐車場に入り、駐車場スペースを見つけてビートルを駐車場に止めた。

「さあ、着いたぞ。」

博士の言葉を聞いてコナン達はビートルから降りた。ビートルから荷物を取り出して、車に鍵をかけた。

「まずはペンションに向かうから、はぐれんと着いて来るんじやぞ。」

「はい。」

歩美、光彦、元太が大きく返事をした。

博士はそれを聞くと、ゆっくり歩き出した。博士が歩き出した途端、コナン達は博士のあとに続けて歩き出した。駐車場を出て、歩いていると色々な人達とすれ違う。コナン達と同様に天体観測に訪れた人達や森林浴に訪れた人達やその他の目的で来た人達とすれ違う。何件かのペンションを通り過ぎると博士が一つのペンションの前で

止まった。

「此処じゃよ。」

博士はコナン達に伝えた。どうやら今日、宿泊するペンションの様だ。コナン達はペンションの方を見た。ペンションの外見はこの森林の風景に良く似合っている。コナン達はそのペンションの中に入った。

### 第13章　　自然の中

「いらっしやいませ…。」

コナン達がペンションに入ると、一人の男性がコナン達に近付いて来た。

「予約した阿笠じゃが…。」

博士は男性に向けてそう言った。

「阿笠様ですね…、少々お待ち下さい。」

男性は予約を確認する為、フロントにあるパソコンを操作し始めた。パソコンを数秒操作したあと、男性はにっこり笑顔を浮かべてコナン達の所に戻って来た。

「御予約確認できました。あと、阿笠様は天体観測の望遠鏡をお貸しする事になってます。」

男性はポケットから鍵を取り出した。

「こちらが阿笠様の部屋の鍵です。部屋は2階の階段を上がった直ぐ側です。」

男性は博士に鍵を渡した。博士は鍵を受け取った。鍵を受け取った



博士達は男性が言った部屋に向かう為に2階に通じる階段を昇って行った。

「あ、この部屋だよ。」

歩美は一つの部屋を指さしながら答えた。博士はポケットから先程受け取った鍵を取り出して部屋のドアノブの鍵を入れる場所に鍵を差し込んだ。差し込んだ鍵を回すと『ガチャ』と鍵が開いた音が聞こえて来た。博士はドアノブを回して部屋を開けた。部屋の中はシンプルな部屋で、何か特別な物は置かれていない。だが、部屋の中にある窓を開けると自然の風、景色、匂いなどを感じる事が出来る。

「重かったぜ…。」

元太が背負っていたリュックを床に降ろしながら呟いた。

「これからどうします？ まだ、時間がありますし…。」

光彦が時計を見ながら答えた。天体観測の時間までまだまだ時間がある。光彦は時間を無駄にしたくない様だ。

「じゃあ、この辺りを歩いてみたらどうじゃ？この辺りは自然も綺麗じゃし、空気も美味しいって話しじゃ。」

博士は窓の外から見える風景を見ながら答えた。

「とにかく、外に出てみようぜ。」

コナンはリュックを置いて、部屋から出る準備をしていた。

「じゃあ、行ってみましょう。」

次に光彦が部屋を出る準備をした。哀、歩美、元太、博士も部屋を出る準備をして部屋を出た。

ペンションの外を出た瞬間、自然の空気が気持ち良く感じた。コナ  
ン達は天体観測までの時間、ペンションの周囲を散歩していた。

「気持ち良いのう…。」

博士は辺りの景色を見ながら答えた。

「こういう景色は都会では見られませんね。」

光彦は自然を感じる様に歩いている。

「こういうのもたまには良いわね。」

哀は穏やかな表情をしながら歩いている。

「あ…、見て川だよ。」

歩美は川を見つけてコナン達に知らせる様に指で川を指した。

「本当だ。川があるぞ。」

元太は川を見ながら口を開いた。森林の間に川が流れている。川は  
都内で見るとより透き通っていて綺麗な川だ。

「綺麗な川じゃな…。」

コナン達は立ち止まり、川を見た。博士は川を見ながら呟いた。コナンはその川を静かに見ていた。

## 第14章　　く星空く

「こちらが天体観測の望遠鏡です。」

少し日が暮れ始めた頃、コナン達はペンションに帰って来て男性から望遠鏡の入った大きな鞆を渡された。博士はその鞆を受け取った。

「天体観測が終わり、こちらに戻って来たら私に声を掛けて下さい。夕食の準備をさせて頂きます。」

男性の話を聞いた後、博士達はペンションの玄関に向かった。

「では、気をつけて行ってらっしゃい。」

男性はにっこり笑顔を見せて博士達を見送った。外に出ると辺りが少し暗くなり始めていた。

「早速、出発しましょう」

博士達は天体観測をする場所まで歩き出した。

ペンションから数分歩いた場所にある少し小高い丘には天体観測を  
楽しむ人達が集まっていた。コナン達は早速、天体観測を始める為  
に博士は望遠鏡を組み立てた。

「よし、完成じゃ。これで、見えるぞ。」

博士は組み立てた望遠鏡を満足そうに見ながら答えた。

「見せて見せて…。」

歩美が最初に望遠鏡を覗いた。今日は天体観測には絶好な空だった。  
星が何時もより綺麗に見える。コナンは綺麗に輝く星は都会ではど  
んな風に見えるのだろうかと考えながら見ていた。

「綺麗ね…。こんなに綺麗に輝く星はあんまり見られないわね。」  
コナンの横に哀が近付いて来てぽつりと呟いた。

「…そうだな。」

「私もあんな風に輝けるかしら？」

哀は空を見上げながら呟いた。その表情は悲しそうに見えた。

「バーロオ、オメエはもう輝いてるじゃねえか？あいつらにとってオメエは星より輝いてる筈だぜ。」

コナンは歩美達の方を見ながら答えた。歩美達は順番交代で望遠鏡を覗いて星を見ている。

「そうね…。」

哀も歩美達の方を見ながら答えた。その時、歩美がコナンと哀に近付いて来た。

「コナン君と哀ちゃんも一緒に見よう。すっごく星が綺麗だよ。」  
歩美が望遠鏡で見た感想を言いながらコナンと哀に言った。

「じゃあ、見てみようかしら。」

哀は望遠鏡に近付いて望遠鏡から星を見た。望遠鏡で見る星は肉眼で見るより遥かに綺麗に輝いて見える。

「本当に綺麗…。」

さっきも同じ様な言葉を言ったが、この星空を見てたら言葉に出したくなってしまった。

「来たかいがありましたね。」

光彦が星空を見ながら答えた。

「そうじゃのう…。こんな星空は余り見る事は出来んからのう。」

月明かりだけが部屋を照らしている。部屋の中は月明かりの光だけが差し込んでいて薄暗い。部屋の中に置かれているパソコンの前に嶋村が座ってパソコンを操作をしている。パソコンの画面の明かりが不気味に部屋を照らす。



「あのエンブレムに刻まれた文字はこの会社…。」

嶋村は腕を組みながら一人しか居ない部屋でぽつりと呟いた。

「…見つけた。」

嶋村は不気味な笑みを浮かべた。その笑みはこの闇の様な部屋に相応しい笑みだった。

## 第15章　夕食

「お疲れ様です。」

天体観測が終わりペンションに戻って来たらペンションの男性が優しく迎えてくれた。

「直ぐに夕食の用意をします。それと、お貸しした望遠鏡は返却して下さい。」

博士は望遠鏡の入った大きな鞆を男性に渡した。

「では、あちらの部屋でお待ち下さい。直ぐに夕食を用意します。」  
男性は軽く頭を下げてコナン達から離れて何処かに行った。コナン達は男性に言われた部屋に入って行った。部屋にはペンションに宿泊している客が夕食を食べている。コナン達は近くに空いている椅子に座った。椅子に座って数分が経った頃、ペンションのスタッフが夕食を運びながらコナン達の所にやって来た。

「こちらが今日の夕食です。」  
スタッフ達は人数分の夕食をテーブルに置いた。

「おかわりは自由です。ごゆっくりどうぞ。」

スタッフ達は軽く一礼をしてコナン達から離れて行った。

「じゃあ、頂くかのう。」

「いただきます。」

博士が言い終えた後、歩美達が大きな声で言った。『いただきます』を言った途端、最初に夕食に手を伸ばしたのは元太だった。元太は嬉しそうな顔をしながら夕食を食べている。どうやら、お腹が空いてた様だ。コナン達は元太の様子を見た後、夕食を食べ始めた。

翌日、ペンションで朝食を食べ終えたコナン達は宿泊代を払い、ペンションを出た。

「楽しかったな…。」  
ペンションを出て、最初に口を開いたのは元太だった。

「星も綺麗だったし、料理も美味しかったね。」  
元太の次に歩美が歩きながらペンションに泊まった感想を答え出した。駐車場に着くまで歩美、元太、光彦、ペンションで泊まった事や天体観測の話をしていた。今日は朝から天気が良く、太陽の日差しが暖かく感じ、凄く気持ち良かった。

## 第16章 〱 神山薬品会社 〱

「ただいま。」

博士のビートルで探偵事務所まで送ってもらって博士達とは事務所の前で別れた。事務所に入ると小五郎は出掛けていたが、蘭が事務所に居た。

「お帰り、コナン君。天体観測は楽しかった？」

蘭は事務所の中で本棚の整理をやっていた。

「うん、楽しかったよ。」

コナンは一番良い笑顔を浮かべながら答えた。

「良かったね。」

蘭はコナンが笑顔を浮かべているのを見て蘭は笑みを浮かべた。

「博士、来たぜ。」

それから二日経った頃、博士から『直ぐに家に来てくれ』との電話があった。コナンは少し面倒そうに博士の家に入った。

「新一君、待っておったぞ。」

博士はパソコンの前で立ちながらコナンを元氣良く迎えた。

「…で、何なんだよ？話したい事って…。」

コナンは博士の居る場所に近付きながら尋ねた。

「分かったんじゃよ。君が探していた会社が…。」

博士の言葉から『会社』と言う言葉を聞いてコナンの表情が少し変わった。

「本当か？博士。」

「この会社じゃよ。」

博士はパソコンの画面をコナンに見せた。パソコンの画面には会社のホームページが映っていた。

「神山薬品会社…。」  
パソコンに映っているのは神山薬品会社のホームページだった。

「けど博士、この会社のエンブレムとあのケースのエンブレムとは全然違うけど…。」  
コナンはパソコンの画面に映っている神山薬品会社のエンブレムを見ながら答えた。

「それは新しいエンブレムじゃよ。ケースにあったエンブレムは前のエンブレムじゃ。」

「前の…？　どういう事だ？」  
コナンはパソコンから顔を離して博士の方を見た。

「神山薬品会社の本社を改築する時にエンブレムも新しく変えたそうじゃ。他にもいろいろ新しくしたそうじゃ…。」

「他に何を新しくしたんだ？」

コナンの表情は少し真剣な顔付きに変わった。

「会社のボールペンやバッジや会社の商品のパッケージの箱なども新しくしたそうじゃ。」

神山薬品会社は大手の薬品会社でコンビニやスーパーや薬局でこの会社の商品は良く見かける。もちろん、コナンも何度も見かけた事がある。

「改築したのはいつ頃からなんだ？」

「5年前じゃ…。」

博士の言葉から5年前と聞いてコナンはケースの事を思い出した。

「あのケースが作られなくなった時期と同じか…。」

コナンは腕を組みながら答えた。

「けど、良く分かったな。あのエンブレムと刻まれた文字が神山薬品会社の事だって…。」

コナンは博士に感心しながら呟いた。



「実はわしの知り合いの友人が以前、この会社に働いていたんじゃないよ。」

「成る程…、それで神山薬品会社の名前が出て来た訳か。」  
コナンは腕を組んでいた手をポケットに入れて、パソコンの画面を見た。

「じゃが…、本当にこの会社が奴等と関係があるのかね？」  
博士は不安を隠しながら少し声のトーンを下げた。

「まだ…、断言は出来ねえ。」  
コナンは深刻な表情をしながら答えた。

「やっぱりそうだったのね…。」  
博士の背後から哀の声が聞こえて来た。コナンと博士は声のする方向を見るとマスクをした哀が立っていた。

「あ、哀君…。」

博士は哀が後ろに居た事に驚いた。

「最近、博士がパソコンで何かを調べていたのは…工藤君に頼まれたのね。」

「マスクなんかしてどうしたんだ？」

コナンは哀がマスクをしているのに気付き、哀に尋ねた。

「風邪よ…。」

哀の声のトーンは何時もより低かった。

「昨日から風邪を引いてのう…。けど、これからどうするんじゃない？」  
博士は哀を心配しながらこれからどんな行動を取るのかコナンに尋ねた。

「神山薬品会社の本社に行くつもりだ。本社は群馬にあるみたいだしな…。」

コナンは神山薬品会社のホームページを見た。本社は群馬県にあると書かれている。

## 第17章　　群馬県

「何でお前まで付いて来るんだ？」

コナンは博士が運転するビートルに乗り、群馬に本社がある神山薬品会社に向かっていた。ビートルの後部座席にはマスクをしている哀が座っている。

「別に良いでしょう。」

「じゃが哀君、もし風邪が悪化したら…。」

博士はビートルを運転しながら後部座席に座る哀に心配そうな声を出した。

「大丈夫よ、さっき博士が持って来てくれた風邪薬を飲んだから。」

それに、隣に得体の知れない人が住んでるし…。」

哀は腕を組みながら答えた。

「得体の知れない人って昴さんの事か？」

沖矢昴は今、工藤新一の家に住んでいる。以前、住んでいたアパートが放火された事件でコナンと出会い、コナンは住む場所が無くな

った昴に自分の家を貸した。

「貴方はあの人をどう思ってるか知らないけど、私はあの人が彼等の仲間だと思ってるのよ。」

「もし、昴さんが奴等の仲間だったら俺や博士やお前は既に殺されている筈だ。」

コナンは窓から外を見ながら答えた。哀は視線を動かす事なく、コナンの話を聞いている。話しをしている間、ビートルは群馬県に少しずつ近付いていた。

「今日、嶋村君はどうしたんだね？」

目暮が部屋に入り嶋村の姿を探しながら部屋に居る刑事達に尋ねた。

「熱があるそうで今日は休むって先程電話がありました。」  
目暮の問いに佐藤が答えた。

「熱が出たのか？」

「最近、忙しくしてましたから…。」

佐藤は最近の嶋村を思い出しながら答えた。事件の捜査で余り休んでなかった。その事で疲れて熱を出したのだと佐藤は思った。

「あとでゆっくり休む様に電話をするか…。」

目暮はぽつりと呟きながら部屋の奥の方に向かって歩き出した。

「此処が神山薬品会社の本社か…。」

コナン達は群馬にある神山薬品会社の本社に着いた。神山薬品会社は群馬でも有名な会社で本社のビルも立派なものだ。もし、組織がこの会社と関わりがあるのなら正面から立ち向かう事は出来るのだろうか？コナンはそんな事を思いながら本社のビルを見上げていた。

「それで、中に入るの？」

コナンの横に立っている哀がコナンの方を見ながら尋ねた。

「ああ…。」

「じゃが、中に入ったとしても話しが聞けるかどうか…。」  
博士は大きなビルを見上げながら答えた。

「そうだな…。警察でもない限りまともに話しが出来るか分からねえ。」

「あれ、君達こんな所で何をしちゃってるのかな？」  
コナン達の背後から聞き覚えのある男性の声が聞こえて来た。

「山村刑事。」  
後ろを振り返ると群馬県警の山村刑事が立っていた。コナンの言葉を聞いて山村は不満そうな顔をしながらポケットから警察手帳を出してコナン達に見せた。

「警部だよ、警部！」

コナンは苦笑いをしながら山村を見た。

「山村警部は此処で何をしてるの？」

コナンは警部と言う言葉を少し強調しながら山村に尋ねた。

「神山薬品会社の人に話を聞きに来ちゃったんだ。」

「もしかして、事件でもあったの？」

山村の言葉を聞いたコナンは『事件』と言う言葉を出した。

「：何でも東京で起こった事件がこの会社と関わりがあるって警視庁から電話があっちゃったんだ。」

山村は周囲の人達に聞こえない様に答えた。

「警視庁の誰から電話があったの？」

「嶋村って刑事だよ。」

山村から嶋村刑事の言葉を聞いて嶋村の事を思い出した。

「倉庫に居た刑事よね、嶋村って刑事…。」

哀は山村に聞こえない様に小声でぽつりと呟いた。

「ああ…。」

「それで、君達は何をしちゃってるの？」

「東京で起こった事件を小五郎のおじさんが調べててこの会社で用事があるって話を聞いて来てくれて頼まれたんだ。」

コナンは思いついた嘘で山村に怪しまれない様に言った。

「な～んだ、毛利さんに頼まれたのか。じゃあ、早く話を聞きたいちゃう。」

山村は元気な声を出して神山薬品会社の本社に入って行った。



「彼、警部になって大丈夫なの？」

コナン達は山村を追って本社のビルに入って行った。

「なっちまったものはしょうがねえよ。」

コナンは苦笑いをしながら哀の問いに答えた。

## 第18章　　研究所

神山薬品会社の本社に入り、社員の一人に案内されて会議室の様な部屋に到着した。『少々お待ち下さい。』と社員の人はそう言うように軽く一礼をして部屋から出て行った。会議室は静かで、外の音だけが聞こえて来る。コナン達は会議室で静かに待っていた。山村は窓から見える景色を楽しそうに見ている。それはまるで子供の様に楽しそうだった。コナンは少し呆れた様子で見ていた。社員の人が部屋から出て行ってから数分が経った頃、部屋に一人の男性が入って来た。30代前半ぐらいで背が高い男性だ。

「お待たせしてすみません。副社長の神山章吾と言います。」  
神山章吾と名乗る男性はポケットから名刺を取り出して山村と博士に渡した。

「群馬県警の山村です。」

「…それで、警察が何の用で此処に？」  
章吾は会議室の椅子に座りながら尋ねて来た。

「東京で起こった事件で間宮麗子と言う女性が死亡した現場でこの

会社のケースを見つかったんです。」

山村は少し緊張しながら神山薬品会社を訪れた理由を話し出した。

「：そうですか。東京でうちの会社のケースが。」

章吾は軽く頷きながら呟いた。

「あ、見つかったケースは前に使われていたケースなんです。」

「前のケース：？」

章吾は理解出来ず首を少し傾けた。

「5年前から使われていないケースだよ。」

コナンが付け足す様に答えた。

「そちらの子供達は何ですか？」

章吾はコナンと哀を見ながら尋ねた。

「僕の助手達です。」

山村は胸を張りながら答えた。その言葉を聞いてコナンは苦笑いをした。哀はコナンの横で呆れた顔をした。

「5年前か…、確か本社を改築した頃だな。」  
章吾は腕を組みながら答えた。

「そういえば、その時に会社のケースも新しくしたな。」  
章吾は思い出しながらぼつりと答えた。

「間宮麗子と言う女性を知ってたりしちゃいます?」

「いや、知りません。」  
山村の質問に章吾は首を横に振りながら答えた。山村はその答えを聞いて残念そうな顔をした。

「この会社を改築した時、ケース以外にもエンブレムも新しく変えたんでしょ?」

「ああ…、良く知ってるな。」

章吾は少し驚いた顔をしながらコナンの質問に答えた。

「他にも何かあるんでしょう？」

「ああ…、本社の改築の為に色々新しくした。会社のバツヂやボールペンやこの椅子やテーブルも新しくしたよ。」

章吾は椅子やテーブルを軽く叩きながら答えた。

「まあ、心機一転の為に全体的に新しくしたな。」

「…：そういえば、あの研究所を閉鎖して新しい研究所に変えたのもその頃だったな。」

章吾はふっと思ひ出しながら顔を天井に向けながら答えた。

「その閉鎖された研究所って何処にあるの？」

コナンは章吾の言葉を聞いて勢いのある声で尋ねた。

「え、ああ…群馬にあるよ。あそこは新薬の研究開発の為に使われていた研究所なんだけど、だいぶ古かったから新しい場所に変えたんだ。」

章吾は呆気にとられながら淡々と答えた。

「その場所の住所とか教えて貰っちゃったり出来ますか？」

「構いませんよ…。」

章吾はすんなりと山村の要求に応じてくれた。

「（閉鎖された研究所…、新薬の開発…か。）」

コナンは腕を組みながら章吾の方をじっと見た。

「神山薬品会社…、あのケースを調べたらそこに辿り着いたのか？」  
「ベントを運転するジェームズが助手席に座るジョディから報告を受けている。」

「ええ…、そのケースは神山薬品会社が以前、使っていたケースです…。」

「ですが、彼等との関係のある情報はありませんでした。」  
神山薬品会社が組織と接触していたら組織を捕まえるチャンスだと  
ジョディは少し期待をしながらその会社の事を調べていた。

「そうか…、その会社はハズレと言う事か…。」  
ジェームズは運転に集中しながらジョディの報告に期待をしていた。  
だが、組織の情報は手に入らず落胆した。

「今回は残念だったが、次がまたあるだろう。」

「そうですね。」  
ジョディは少し小さな声でぼつりと答えた。

## 第19章　くあの時と…く

「じゃあ、僕は帰るね。毛利さんによろしく…。」

神山薬品会社を出た直後、山村は手を大きく振りながらコナン達から離れて行った。

「さて…、これからどうするんじゃ？」

山村の姿が見えなくなると博士がコナンに尋ねて来た。

「勿論、さっき言ってた研究所に向かう。警察に先を越されたらまずいからな。」

コナンは笑みを浮かべながら答えた。

「じゃが、その場所に奴等に関する手掛かりはあるのかね？」

「それは分からねえ…。何もないかもしれないし、何かがあるかもしれない。」

コナンは真剣な眼差しをしながら博士の問いに答えた。



「行ってみんと分からんと言う訳じゃな。」  
博士は納得した様な言葉を発した。

「ああ…、灰原、行くぞ。」  
コナンは後ろを振り返りながら言った。しかし、後ろを振り返っても哀の姿はなかった。

「あれ、灰原はどうしたんだ？」  
コナンは辺りを見渡しながら博士に尋ねた。辺りは人が沢山歩いていて哀の姿を見つけられなかった。

「一緒に居たと思ったんじゃが…。」  
博士は心配になりながら辺りを見渡した。辺りを見渡しているとベンチに哀が座っているのを見つけた。コナンと博士は哀が座っているベンチに近付いた。

「どうした灰原？ 具合でも悪いのか？」  
コナンは少し心配そうに哀に尋ねた。

「大丈夫よ。ちょっとふらつとしただけだから。」  
哀は心配かけない様に少し辛そうに笑みを浮かべた。

「哀君、本当に大丈夫かね？風邪が酷くなったんじゃない。」  
ベンチから立ち上がった哀を心配そうに見ながら博士は尋ねた。

「心配しないで大丈夫よ……。それで、これから閉鎖された研究所に向かうの？」哀はコナンの方を向いて尋ねた。

「ああ……。」

「だったら、早く行きましょう。」  
哀はそう言い終えると、ゆっくり歩き出した。コナンと博士も哀のあとに続いて歩き出した。

コナン達が神山薬品会社の本社から離れて行った同じ頃、一人の男性が会社に入ってきた。男性は靴音を鳴らしながら受付に向かった。

「すみません。警察の者ですが……。さっき此処に子供を連れた刑事が来ましたよね？」

受付に居る女性に警察手帳を見せながら嶋村が尋ねて来た。

「ええ…。」

受付に居る女性はゆっくり首を縦に振りながら答えた。

「何を話したか教えて貰ってもよろしいですか？」

嶋村は笑みを浮かべながら優しい声で頼んだ。

「ただいま…。」

事務所のドアを開けて蘭が帰って来た。蘭の手には買い物袋がある。

「帰って来たか、蘭。」

小五郎は新聞を読みながらラジオを聞いている。どうやら、競馬の様だ。

「あれ？コナン君は…？」

蘭は辺りを見渡しながら小五郎に尋ねた。

「まだ、帰ってないぞ。」

小五郎は蘭と目を合わさずに新聞とラジオに集中していた。

「えー、まだ帰ってないの？何処に行ったか知らないの？」

「知らねえな。けど、そのうち帰って来るだろう。」

小五郎は少し面倒そうな顔をしながら答えた。

「うーむ…。」

道路の脇にビートルを止めながら博士は地図を見ながら困っていた。

「…道にまよったな。」

博士の困った表情を見ながらコナンはぼつりと答えた。

「この道で合ってたと思ったんじゃが…。」

「地図貸してみろよ。」

コナンの言葉を聞いて博士はコナンに地図を渡した。コナンは地図と辺りの風景を見ながら今、自分が居る場所を探している。

「たぶん…、この交差点を右に曲がれば良いと思うけど…。」

コナンは目の前にある交差点を指を指しながら答えた。

「その後がややこしいな…。」

コナンは地図に視線を落としながら答えた。道を間違えた事で研究所に行く道が良く分からなくなっていた。

「おい灰原、どの道行ったら良いか分かるか？」

コナンは後ろを振り返りながら哀に尋ねた。後ろを振り返ると哀が苦しそうな顔をして胸を押さえながら座席に倒れ込んでいた。

「灰原、どうした!」

哀の苦しそうな顔を見てただ事ではないと直感し、後部座席に向かった。

「あ、哀君!」

博士も哀の姿を見て後部座席に向かった。

「灰原どうした? 何処か苦しいのか?」

コナンは心配しながら哀に尋ねた。しかし、哀は答える事も出来ない程苦しい状況だった。

「博士、とにかく病院だ。この苦しみ方は尋常じゃねえ。」

哀の苦しみ方が尋常じゃない事に気付き、コナンは少し焦りながら博士に伝えた。

「(心臓が壊れる様な感じ…、体が潰れそうな痛さ…、あの時と同じ感じ…)」

哀は苦しみながらこの感じを前に味わった事を思い出す。前にコナンに言われて飲んだ酒がこの状況を生み出した事を…。

「(まさか…。)」

哀は更に強く胸を押さえ、更に痛みが体中に増して来た。

「灰原、しっかりしろ!」

哀が胸を強く押さえた事に気付き、コナンの声はビートルの中に響いた。

## 第20章　　本来の姿

ビートルは近くの駐車場に止まっている。その駐車場には他の車も止まっている。博士はそわそわしながらビートルの近くをうろうろしている。

「新一君、こっちじゃ…。」

コナンが駐車場に入って来た姿を見つけた博士はコナンに手を大きく振った。コナンの両手には紙袋あった。コナンは紙袋を持ちながらビートルに近付いた。ビートルの後部座席に近付き、ビートルから目を反らしながら後部座席のドアを開けた。

「ほらよ、買って来たから直ぐに着替えろよ。」

後部座席に紙袋を置き、コナンはビートルのドアを閉めた。ビートルのドアを閉めたコナンは博士の横で止まった。

「すまんのう…、新一君。」

博士は面目なさそうな顔をしながらコナンに謝った。

「別に構わねえよ。」



「…終わったわよ。」

ビールの中から哀の声に似た大人の女性の声が聞こえて来た。コナンと博士はビールに戻り、博士は運転席にコナンは助手席に乗った。

「服は大丈夫か？」

コナンは先程、買って来た服が合ってるか気になっていた。

「大丈夫よ、少しぶかぶかだけど…。」

後部座席には哀の姿はなく、彼女の本来の姿の宮野志保が居た。綺麗な顔立ちで少しぶかぶかの服から出る素肌は白く、整ったプロポーションだ。彼女ならモデルになってもおかしくはなかった。コナンと博士は彼女の美人さに見とれていた。

「なに…？」

志保は自分の事を見ながら固まっているコナンと博士に尋ねた。

「いや、何でもない。」

コナンはそう言い終えると、前に向き直した。

「ねえ博士、私は風邪薬を持って来てって言ったわよね？」  
志保の声は軽く怒ってた。

「すまんのう、哀君に言われて取りに行っただんじゃが…、薬のビンが二つ置いてあって…。」

「成る程…、間違えたって訳ね。」  
志保は呆れながら答えた。コナンも博士の言葉を聞いて呆れた顔をした。

「それで、何時までその姿で居られるんだ？」  
コナンは呆れた顔から真剣な顔付きに変わった。

「そうね…、一日ぐらいはこの姿かもね。」  
志保は焦る事もなくさらりと答えた。

「これからどうするんじゃ？」  
博士はコナンの判断を仰ごうと尋ねた。

「灰原をこの状態で外に出すのはまずい。今日は一旦戻った方が良  
いだろう。」

「じゃあ、戻るかのう。」

博士はビートルのエンジンをかけた。静かな車内にエンジンが響い  
た。

「…此処まで来たら行った方が良いんじゃない？」

コナンの判断を否定しながら志保が静かに尋ねて来た。

「オメエ分かってるのか？もし、奴等に姿を見られたら…。」

「…私や貴方や博士達が殺されるって言いたいんでしょう？」

志保は腕を組みながらコナンに確認する様に尋ねた。

「分かってるなら何でそんな事を言うんだ？」

「疑問を取り除く為かしら？」

志保はコナンに笑みを浮かべながら答えた。

「疑問…だと？」

志保の言葉の意味を理解できなかった。彼女が何を言いたいのか…。

「あの会社と彼等が関わりがあるって疑問に思ってるんでしょう？  
その研究所に向かえば何かあるんじゃないかって思ってるんでしょう？」

コナンは志保の言葉の聞いて自分が思ってる事を言われて内心少し焦った。

「それに、閉鎖された場所に誰か居ると思う？まあ、そういう場所が好きな物好きが居たら話しは別だけど…。」

「どうするんじゃ、新一君。」

志保が言い終えた途端、博士がコナンに尋ねた。コナンは腕を組みながら少し考えている。

「分かった。けど、お前は車から降りるなよ。」  
コナンは志保に忠告しながら研究所に向かう事に決めた。

「分かってるわ。」

「じゃあ、研究所に向かえば良いんじゃない？」  
博士は確認する様にコナンに尋ねた。

「ああ…。」

コナンが返事をする博士はビートルを発進させた。ビートルは駐車場から出て、研究所に向かって走り出した。

## 第21章　　閉鎖された研究所

駐車場から出て、30分ぐらい車を走らせると辺りは人通りが少なくなかった。駐車場を出た頃は車の往来も多かったが、今は一台か二台ぐらいしか車の往来はなかった。辺りの風景もビルが建っている数は少なくなっている。

「あ、見えて来たわい。」

ビートルの目の前に周りの景色には似合わない大きな建物が見えて来た。どうやら、目的の建物はその建物の様だ。

「博士、車を止めてくれ。」

コナンの言葉を聞いて博士はビートルを止めた。

「じゃあ、行ってくるから博士と灰原は車から降りるなよ。」

ビートルが止まったのを確認してからコナンはビートルのドアを開けて車から降りた。

「一人で大丈夫かね？」

一人で行こうとしているコナンを心配しながら尋ねた。

「大丈夫だよ。もし、何かあったら連絡するから…。」  
コナンはビートルのドアを閉めて大きな建物に向かって走って行った。走って行く姿をビートルの中から志保が見ていた。

「遅いなあ、コナン君。」

蘭は台所で今夜の夕食の準備をしている。台所にある時計を見ながら蘭は今だ帰って来ないコナンを心配している。

「ちょっと電話してみよ。」

蘭はコナンに電話する事を思い付き、ポケットから携帯を出した。

建物の目の前まで来るとさっきよりも更に大きく見える。建物の目の前には車を止める駐車スペースがあり、入口の門には神山薬品研究所と書かれている。

「（入ってみるか…。）」

コナンは建物の扉に向かって歩き出そうとした時、ポケットに入れている携帯が鳴った。コナンは立ち止まり、ポケットから携帯を出して電話に出た。

「もしもし…。」

『コナン君、何処に居るのよ？もうすぐ夕食が出来るよ。』  
電話の相手は蘭からだった。受話器越しから聞こえて来る蘭の声は少し怒ってる様だ。

「ら、蘭姉ちゃん。」

蘭から電話が掛かって来るとは思っていなかったコナンは少し驚いた声を出した。



『今、何処に居るの？』  
再度、蘭から同じ質問が飛んで来た。

「博士と一緒になんだ。さっきまで遊園地に遊びに行つてこの後、博士と一緒に夕飯を食べるから僕の分はいらないから…。」

コナンはそう言い終えると、電話を急いで切った。電話を切り、コナンは携帯をポケットに入れながら建物の扉に向かった。扉は鍵が閉まっておらず、誰でも入れる様になっていた。『無用心だな』と思いつながらコナンは扉を開けて中に入った。中に入ると辺りは真っ暗で何も見えない。コナンは腕時計型ライトのスイッチを入れた。ライトを点けると建物の中が少し明るくなった。その時、背後から扉が閉まる音が聞こえた。コナンは少し驚きながら勢い良く後ろを振り返った。

「は、灰原…。」  
扉を閉めて背後に居たのは志保だった。

「何してるんだ？車から動くなつて言っただろ？」  
コナンは呆れた顔をしながら少し怒った声を出した。

「貴方を監視しに来たのよ。一人で行かしたら何するか分からないでしょ？」  
志保はライトを点けながら答えた。

「…まったく、俺から離れるなよ。」

コナンはそう言い終えると、ゆっくり歩き出した。コナンのあとを志保が追いかける様に歩き出した。

建物の中に入り、少し歩くと大きなホールの様な部屋に着いた。どうやら此処は休憩所の様だ。テーブルや椅子が沢山並んでいる。

「此処は休憩所みたいね。」

志保は部屋の中を一通り見た後にぽつりと答えた。

「シャワールームもあるのか…。」

休憩所の部屋の横の部屋にはシャワールームがあった。

「以外と設備は整ってるのね。」

コナンの横に來た志保が静かに呟いた。

「次の場所に行くぞ。」

コナンはシャワールームから視界を外し、休憩所の部屋から出て行った。志保も休憩所の部屋から出て行った。

休憩所の部屋から出て少し歩くと吹き抜けの天井のある部屋に辿り着いた。コナンと志保は天井を見上げるとこの建物が更に大きいと感じた。

「ねえ、あそこに階段があるわよ。」

志保が指を指す方向を見ると上に繋がる階段があった。

「上に行ってみるか…。」

コナンと志保は階段に近付き、階段を昇って行き始めた。

## 第22章 く研究所の内部く

「閉鎖されたのにまだ残ってるのね？」

階段を昇り、近くの部屋に入るとそこには今まで使っていた物が置かれていた。本や研究に関する資料などが机の上に無造作に置かれていた。

「閉鎖するなら片付ける事ぐらいしろよな。」

コナンは無造作に置かれた資料に視線を向けながら答えた。

「…此处にある物は必要なくなったからじゃないの？」

「それでも片付けはするだろう。この資料って此处で何かの研究をしていたその実験結果だろ？」

コナンは志保に持っていた資料を見せながら答えた。

「そうみたいね…。」

志保はコナンが持つてる資料を見た後、辺りに無造作に置かれている資料に視線を落とした。他にも実験結果が書かれた資料や研究内容が書かれた資料が置かれている。

「こういう物はいらなくなったら捨てるのが普通だろ？」

コナンは資料を元の場所に戻して部屋のドアに向かい、ドアを開けた。志保もあとに続いてドアに向かい、コナンと一緒に部屋から出た。

「…この研究所、閉鎖しなくても使えたと思わない？」

コナンの後ろを歩く志保が尋ねて来た。

「ああ…。設備的にも十分だし、建物内部は結構広いし閉鎖するのは勿体ないな。」

「ねえ、これ見て…。」

志保は立ち止まり、コナンに言いながら壁の方を向いた。

「何だ？何かあったか？」

志保の言葉を聞いてコナンは立ち止まり、志保が見ている壁を見た。壁にはこの研究所の内部の地図が書かれていた。

「この建物の地図か…。」

「そうみたいね。一階には食堂や休憩所や仮眠室があるのね。二階は資料庫…。」

志保は地図を見ながら地図に書いてある研究所の一階と二階のフロアの説明を読んだ。

「成る程、だからあんなに本や資料があった訳か。」  
コナンはさっき入った部屋の事を思い出しながら答えた。

「三階は全体が研究室で、四階は薬品庫か…。」

「薬品庫…、何か残ってたりするかしら？」  
志保は薬品庫と言う言葉に興味を持った。

「そういう物はもう残ってねえだろうな。」  
コナンは辺りを見渡しながら答えた。

「でも、何かあるかもしれないから行ってみましょう。」  
志保が先に歩き出し、上に向かう階段に向かって歩き出した。

「遅いのう…、何をしてるんじゃない。」

辺りは真っ暗な夜になっていた。周囲には明かりがなく、ビートルに乗っていても車の中は暗い。博士は暗いビートルの中で時計を見ながらコナンと志保の心配をしていた。その時、後ろの方から車の騒音が聞こえて来た。静かな場所で博士もその車の騒音に気付き、後ろを振り返った。博士が後ろを振り返った直後、ビートルの横をその車が通り過ぎて行った。

「!!!!」

博士はその車を見て、驚愕した。目の前を通り過ぎて行った車が見たことはない車だったからだ。

「た、大変じゃ…!」

博士の脳裏にコナンと志保が映った。

「やっぱり何もねえな。」

コナンと志保は四階の薬品庫フロアに来ていた。しかし、薬品は全く置いてなかった。

「薬品関係の物はないわね。」

志保は部屋の中を見ながらぼつりと答えた。

「あっちの方も探してみるわ。」

「お、おい…。」

コナンが引き止める前に志保は部屋から出て、コナンの視界から消えた。志保が視界から消えた直後、コナンの携帯が鳴った。コナンはポケットから携帯を取り出して電話に出た。



「もしもし…。」

『わしじゃ、新一君。』

電話の相手は博士からだった。

「どうした？何かあったのか？」

『大変なんじゃ。今、その建物の中に入って行っただんじゃ…。』

博士の声は焦っていて言葉が早口になっていた。

「落ち着けよ博士。何が入って行っただんじゃ？」

コナンは博士を落ち着かせながら尋ねた。

『入って行っただんじゃよ…奴等が。』

「なに！」

博士の言葉から予期せぬ言葉が飛び出して来た。コナンはその言葉を聞いて驚いた声を出した。

バン…、

一発の銃声が静かな建物の内から不気味に響いた。

## 第22章 く研究所の内部く（後書き）

こんにちは紅佐洲仮です。

いよいよ『謎を求めて…』はクライマックスです。

研究所の内で奴等と接触！

コナンと志保はどうなるのか？

また、次回もよろしくお願いします。

## 第23章 く黒の再会く

バァン…、

一発の銃声が静かな建物から内から不気味に響いた。

「（銃声…、まさか！）」

コナンの脳裏に志保の存在が浮かんた。

『今の音は何じゃ！』

さっきの銃声の音は博士にも聞こえた様だ。

「博士はそこから絶対に動くな。」

コナンはそう言い終わると電話を切り、携帯をポケットに入れながら銃声がした方向に向かって走り出した。

「はあ…、はあ…、はあ…。」

生暖かい息が建物の内に響く。腕から鮮血が一滴一滴床に落ちていく。コナンに買って貰った服にも血が染み込み出している。志保は腕を押さえながら目の前に居る人物達を見た。志保の目の前には拳銃を構えたジンとその横にはウォッカが立っていた。

「久しぶりだな…シェリー。」

ジンは笑みを浮かべながら口を開いた。

「どうして分かったの？私が此処に居るって…？」

恐怖と不安を感じながら志保は真っ直ぐジンを見ている。

「裏切り者のお前がこの中に入って行く姿を見かけたという報告があつてな…。」

ジンは銃口を志保から外す事なく志保の問いに淡々と答えた。

「（まさか、組織の人間が…。）」

ジンの言葉を聞いて志保は驚愕した。こんな閉鎖された建物に組織の人間が居ないと判断していたからだ。

「…そろそろ再会も終わりだ。此処はお前の死に場所には相応しくはねえが…。」

ジンは勝ち誇った瞳と冷酷な表情をしながら拳銃の引き金に手を伸ばした。

「お前との再会を祝して姉の元に行かせてやる。」

志保は覚悟をした。この状況では助かる事も出来ない。相手は二人…、どう考えても勝ち目はない。助かる可能性はゼロだと彼女は感じた。彼女は逃げる事を諦め、死を受け入れようと考え始めた時だった。

志保の背後から物凄いスピードで風を切る様にサッカーボールが暗闇からジンに向かって飛んで来た。ジンはサッカーボールに気付いたが、避ける前に持っていた拳銃を飛んで来たサッカーボールによって弾かれた。弾かれた拳銃を床に落した。

「逃げろ！」

暗闇からコナンの叫び声が響いた。その叫び声は死を考えていた志保に取って生きる希望の様に感じた。

「誰だ！出て来い！」

ウォッカはポケットから拳銃を取り出して声のする方向に向かって発砲した。その間に志保はジン達から必死に逃げる為に走り出し、

暗闇に消えて行った。

「兄貴、大丈夫ですかい？」

ウォッカはジンの方に視線を移しながら尋ねた。ジンは何も答えず、床に落ちた拳銃を手を取った。

「どうやら、シェリーにはナイトが居る様だ。」

「さっきの奴の事ですかい？」

志保に逃げる様に指示をした人物の事だとウォッカにも分かった。

「：シェリーを追うぞ。見つけ次第始末しろ。」ジンは拳銃を手に取り、ゆっくり歩き出した。

「了解。」ウォッカはジンのあとに続いて歩き出した。

建物が全体的に見える道路の端に車が止まっている。道路を通る車はその車を気にする事なく通り過ぎて行く。その車の中に嶋村が双眼鏡で建物を見ている。

「ポルシェ356A…。」

双眼鏡で建物の近くを見ると、建物の目の前には黒のポルシェが止まっているのが確認出来た。

「あいつ…か。」

嶋村は黒のポルシェを見ながらぼつりと答えた。



## 第24章　　恐怖の闇

「あのボウズはどうした？」

小五郎は夕食を食べながらコナンが居ない事に気付いた。

「コナン君なら今日は夕飯はいらないって…。博士と一緒に食べて来るみたい。」

蘭はお茶を飲みながら小五郎の質問に答えた。

暗闇の建物の中を志保は必死に走っていた。今度捕まったら必ず殺される。捕まらない為にも早く彼と合流しなければ、さっき救ってくれた彼に…。彼女は走りながら辺りを見渡しながらコナンを探していた。その時、誰かに手を掴まれた。

「え…？」

志保は立ち止まり、後ろを振り返った。そこには、コナンが立っていた。志保の腕を掴んだのはコナンだった。

「とにかく、隠れるぞ。」

コナンは志保の腕を掴んで近くにあった沢山荷物を積み上げられた場所に隠れた。隠れた瞬間、ゆっくりと靴音が響いて来た。靴音は段々と大きくなっていく。志保は靴音が大きくなっていく度に恐怖感に押し潰されそうになり、体が震え出した。その時、志保の手をコナンが優しく握った。

「大丈夫、心配するな。」

コナンは震える志保に安心させる様に言った。コナンに手を握られ何処か安心感を覚えた。コナンと志保が隠れてる場所の目の前をジンとウォッカが通り過ぎて行った。

「（ジン…、ウォッカ…。）」

コナンはジンとウォッカが歩いて行く方向を目で追った。

「兄貴、居ませんぜ。」

視界から消えてからウォッカの声が聞こえて来た。

「このフロアにはいねえ様だな。」

ウォッカの次にジンの声が聞こえて来た。

「お前は上を調べる。俺は下を調べる。」

「分かりやした。」

ウォツカはそう言い終えると、靴音が少し早くなった。どうやら、歩くスピードを上げた様だ。その数秒後、靴音はコナンと志保の耳から消えて行った。

「どうやら行ったみてえだな。」

コナンの表情が一瞬だけ安心した様に見えた。

「撃たれたのか…？」

コナンが志保の方を見ると、志保が腕を押さえながら痛みに耐えていた。

「大丈夫よ、かすり傷だから。」

志保はコナンにこれ以上心配かける訳にはいかないと、痛みに耐えながら笑みを浮かべた。コナンは志保が無理に笑顔を見せている事は知っていた。彼はポケットからハンカチを取り出して志保の腕に近付いた。

「大丈夫って言ったでしょ？」

「バーロオ、かすり傷でも何でも血が出てるなら止血は必要だろ。」  
コナンはハンカチを志保の腕に巻き、止血をした。

「これで大丈夫だ。」

「あ、ありがとう。」

志保は少し恥ずかしそうにしながらコナンに感謝した。

「しかし、何で奴等が此処に…。」

コナンは疑問に思っていた。こんな閉鎖された建物に何故、奴等が現れたのか？この建物に奴等に関する手掛かりがあるのか？コナンは真剣な表情で考えていた。

「ジンが言ってたわ。私がこの研究所内に入って行く姿を見かけた  
っていう連絡があったって…。」

志保はジンが言っていた言葉を思い出してコナンに言った。

「つまり、奴等の仲間が近くに居た訳か…。」

コナンは志保の言葉を聞いて奴等の仲間がこの建物の近くに居たと考えた。

「とにかく此処から脱出するぞ。」

コナンは隠れて居る場所から出て、慎重に辺りを見渡した。辺りにジンとウォッカの姿はなかった。

「でも、どうやって降りるの？階段はジン達が向かった方にしか…。」

「階段は他にもあるぜ。」

コナンはジン達が向かった方とは逆の方に向かって歩き出した。

「え？本当なの？」

志保は少し驚きながらコナンが歩き出した方向に歩き出した。

「ああ…、此処から少し離れてるけどな。」  
コナンは注意深く歩きながら答えた。コナンと志保は階段を目指して暗闇の建物を歩き続けた。

## 第25章　　出口への道

「此処だ…。」

コナンと志保は別の階段の所に辿り着いた。階段は上と下に続いていた。

「とにかく此処から降りて脱出するぞ。」

コナンは後ろに居る志保の方に振り向いた。振り向くと志保は俯きながら床を見ていた。

「どうした？」

志保の事が心配になり、コナンは彼女に近付いた。

「…ごめんなさい。」

「な、何だよ？急に…。」

志保が突然謝った事にコナンは少し戸惑った。

「あの時、私が此処に来ようなんて言わなければ彼等と会う事は無

かったのに…。」

志保は後悔していた。此処に来る事を諦め様としていたコナンと博士に自分はそれを反対した事に…。心の中で安心していたのかも知れない。組織と接触する事なんてないと…。忘れていたのかも知れない。自分が組織を裏切ったシェリーだという事に…。

「そんな事でオメエを責めたりはしねえよ。」

コナンは優しく志保に言った。

「で、でも…。」

「謝るなら後で謝ろうぜ。早くしねえと外で待ってる博士が心配するだろ?。」

コナンは志保に向けて笑みを浮かべた。志保はその笑みを見て、彼女の口元が緩んだ。私は彼の笑みに何度救われたのだろうか?そんな事を考えていると自然と口元が緩んだ。

「そうね…、行きましょう。」

志保の合図を聞いてコナンと志保は階段を降りて行った。



「ど、どういう事？階段が無くなってる。」

三階に降りたコナンと志保の目の前には二階に降りる階段が無かった。階段がある場所と思われる場所は物置になっていた。

「此処で途切れてるみたいだな。」

コナンは辺りに階段らしき物はないか探しながら呟いた。

「これからどうするの？」

「他の階段を探す。」

コナンの判断は早かった。志保が尋ねた数秒後に彼は答えた。

「他に階段があるの？」

志保は少し疑いながらコナンに尋ねた。

「こんな広い建物に階段がこれ以上無かったら変だろ？」

「そうね…。」

志保は少し考えてからぽつりと答えた。

「じゃあ、行くぞ。」

コナンと志保は階段を探す為、歩き出した。

辺りの気配は全く感じられない。外は真っ暗な夜で建物内は外の影響で一段と真っ暗だ。歩く度に響く靴音だけが不気味な恐怖感を出している。その靴音は響く度に暗闇に飲まれて行く。

ジンは先程、始末損ねたシェリーを探している。彼女はまだ、この建物内からは出て居ない。始末をするならこの場所から一步も出してはならない。ジンの瞳は微かな気配すら逃さない様な感じだ。その時、ポケットに入っていた携帯が鳴った。ジンは歩きながら携帯をポケットから取り出し、電話に出た。

「シェリーは見つかったか？」

『上には居ませんぜ。』

電話の相手は上の階を調べに行ってるウォッカからだった。

「だったら…、下だ。」

ジンは上の階にシェリーが居ない事が分かり、不気味な笑みを浮かべた。

「上に居ねえならシェリーは下だ。お前も下を調べろ。」

ジンはそう言い終えると、電話を切りポケットの中に入れた。

「この階段…、最初に昇って来た階段よね？」

志保の目の前にはさっきの階段より少し大きめの階段があった。

「ああ……。どうやら、この階段は全部繋がっている様だ。」  
コナンと志保はこの階段を使って四階まで昇った。つまり、この階段は一階まで続いているという事だ。

「…降りるぞ。」

コナンはそう言い終えると、階段を降り始めた。志保もコナンのあとに続いて階段を降りて行った。

## 第26章　く救いの音く

コナンと志保は階段で一階まで降りた。コナンと志保はジン達が居ないか警戒をしている。

「確か…、あっちから来たわよね？」

志保は来た方向を思い出しながらコナンに尋ねた。

「ああ…、行くぞ。」

コナンと志保は出口に向かって歩き出した。歩くスピードは先程より速くなってるが、音を立てずに歩いている。天井が吹き抜けの部屋を出て、少し歩くと大きなホールの様な休憩所の部屋にやって来た。この部屋を出ると出口はもうすぐだ。一刻も早く此処から志保を脱出させなければ彼女をこれ以上組織と接触させる訳にはいかない。コナンは少し焦りながら志保の前を歩いていた。

バァン…、

その時、コナンの背後から銃声が響いた。コナンが後ろを振り返ると志保は床に倒れていた。

「(灰原!)」

コナンが志保に近付こうとした時、彼女の目の前にジンとウォッカの姿があった。コナンはジンとウォッカに姿が見られない様に近くテーブルの下に隠れた。

「逃げるのは終わりだ…。」

ジンは銃口を志保に向けながらゆっくり近付いた。志保は恐怖と不安で床から立ち上がる事が出来なかった。

「どうやらお前には協力者が居るみてえだな。」

ジンが発した『協力者』と言う言葉を聞いて志保は動揺しながら視線で辺りを見渡した。辺りにコナンの姿がなくて彼女は少し安心した。

「…この近くに居る様だな。」

志保の様子を見てジンは志保の協力者がこの近くに居ると悟った。

「協力者なんて居ないわ! 私だけよ。」

志保は焦りながらジンの言葉を否定した。

「調べれば分かる…。ウォッカ、辺りを調べろ。」

「分かりやした。」

ジンの命令を聞いてウォッカはポケットから拳銃を出して辺りを探し出した。

「見とけシェリー…。お前に関わった人間がこれからどうなるか。」  
ジンは不気味な笑みを浮かべながら冷酷な視線を志保に向けてた。

「（工藤君、お願い逃げて…。）」  
この状況でコナンだけでも助かって欲しい。志保の心の中はコナンが生きてこの場所から逃げて欲しい事だ。犠牲になるのは自分だけでいい…。

「（この状況をどうやって打ち破る？）」  
コナンはテーブルに隠れて此処から脱出する方法を考えている。その間にもウォッカは辺りを探している。

「（相手は二人。二人なら倒せる可能性はあるが…。）」  
コナンは隠れながら志保の姿を見た。彼女の目の前には拳銃を持ったジンが立っている。もし、ジンの目の前に出て彼女を助け出そうとしてもジンは彼女を人質に取る。そうなったら、自分も彼女も助かる可能性はなくなる。

「（くそ、どうする？このままじゃあ…、俺も灰原も。）」  
コナンは焦りながらこの状況を脱出する方法を考えていた。

「（え？この音…？）」  
脱出する方法を考えていた時、建物の外からある音が微かに聞こえて来た。

「兄貴、パトカーのサイレンですぜ。」  
建物の外から微かに聞こえて来る音はウォッカにも聞こえていた。

「（こっちに近付いてるか…。）」  
パトカーのサイレンの音が段々と大きくなって行く。ジンはパトカーがこの建物に近付いてると直感した。



「ど、どうしやす？」

ウォツカは少し焦りと不安を感じながらジンに尋ねた。

「…引き上げるぞ。」

ジンは構えていた拳銃をポケットに入れながら答えた。

「今回は見逃してやる…。だが、覚えとけ。お前は我々から逃れる事は出来ねえ。」

ジンはそう言い終えると、志保から視線を外して建物の出口に向かって走って行った。ウォツカも建物の出口に向かって走って行った。志保は『死』と言う不安から解放されて安心した様に目を閉じた。ジン達が居なくなったのを確認してからコナンはテーブルから出て来て志保に近付いた。コナンは志保の姿を見てホッとした。彼女が生きている事に…。

## 第27章 く浮かび上がる謎く

志保が意識を失ったのでコナンは博士を呼び、彼女を連れて建物から脱出した。博士は意識が戻るまで彼女をビートルの後部座席に寝かした。彼女を寝かした途端、建物の前にパトカーが止まり、山村が降りて来た。

「山村警部、どうしたの？」

コナンは山村の姿を見つけて尋ねた。

「君達、怪しい二人組を見ちゃったりしてない？」

山村はコナンと博士に近付きながら尋ねた。

「怪しい二人組？」

博士は突然の事で山村が言った意味が分からなかった。

「電話が掛かって来ちゃったんだ。この建物の中に怪しい二人組が入って行ったって…。もしかしたら、何かをするかも知れないから直ぐに来ちゃってってくれって。」

山村は此処に来た理由をコナン達に言った。

「でも、どうやらハツタリだったみたいだね。」

「そ、そうじゃのう。」

山村の言葉を聞いて博士がぽつりと答えた。コナンは黙って話を聞いていた。

嶋村は双眼鏡でコナン達を見ている。この場所から遠くて何を話してるかは分からない。嶋村は双眼鏡で山村、コナン、博士の姿を双眼鏡でじっくり見ていく。そして、ビートルの後部座席に寝かされている志保の姿も双眼鏡の視界に入った。志保の姿をじっと見た後、嶋村は笑みを零しながら双眼鏡を助手席に置いた。

「江戸川コナン…か。」

嶋村はぽつりと呟きながら車のエンジンをかけてアクセルを強く踏んで車を発進させた。車は直ぐに夜の中に消えて行った…。

志保はゆっくり目を覚ますと自分がビートルの中に居る事が分かった。車内からビートルが動いている事が分かり、辺りの風景もあの建物の近くではない事は直ぐに分かった。志保はゆっくりと起き上がった。

「やっと目覚めたか。」

志保が目覚めた事に気付き、ビートルの助手席に座っているコナンが口を開いた。

「哀君、大丈夫かね？」

ビートルを運転する博士が志保を心配しながら尋ねた。

「ええ…。それで、彼等は？」

「パトカーの音を聞いて逃げたようじゃ。」  
志保の質問に博士が優しく答えた。

「博士が警察を呼んだの？」

「いや、呼んでないわい。」

博士は首を横に振りながら否定した。

「じゃあ、工藤君が？」

志保はコナンの方に視線を移しながら尋ねた。

「俺も呼んでねえよ。」

コナンの返答に志保は少し驚きと戸惑いを感じた。

「じゃあ…、誰が？」

あの時、警察を呼ぶ状況を知っていた人間は目の前に二人だけ…、それ以外に居るのか？志保は状況が掴めずにいた。

「山村警部の話しだと怪しい二人組がああ建物の中に入って行っちゃって電話があったみてえだ。」

「怪しい二人組って…。」

コナンの話しに出て来た怪しい二人組の予想は直ぐに出来た。

「ジンとウォツカの事だろうな。」

「しかし、気になるのう。警察を呼んだ人物の事が…。」

博士はビートルを運転しながら警察を呼んだ人物の事を気にしていた。

「ああ…。あの状況で警察を呼ぶにはあの建物の中で何が起ったか知ってなければならぬ。建物の中には人が住んでる気配はなかった。俺達が建物の中に居る間は人は居なかった。」

コナンは腕を組みながら淡々と話し出した。

「あの建物の中に居たのは私達以外には彼等しか居なかった…。彼等が警察を呼ぶ事なんてないわね。」

「じゃあ、一体誰が？」

コナンと志保の話しを聞き終わった博士が真剣な表情をしている。

「もしかしたら…、別の誰かが居たかもしれないな。」

コナンは視線を窓の方に移した。窓からは夜空に輝く星が夜を鮮やかにしている。ビートルは東京に向かって走り続けていた。

## 最終章　（闇に潜む謎）

都内にある立体駐車場には沢山の車が止まっている。駐車場に止めてある一台の車の中で一人の女性が電話をしていた。電話をしている彼女は間宮麗子に爆弾入りのケースを渡した組織の人間だ。車の中は彼女以外は居ない。

「…それで、シェリーは殺せたの？」

彼女は期待した表情をしながら電話相手に尋ねた。

『いや、邪魔が入って殺しそこねた。』

電話相手はジンだった。受話器からジンの声が聞こえて来る。

「残念だったわね。殺しそこねて…。」

彼女は笑みを浮かべながら答えた。彼女が笑みを浮かべている事は誰も知らない。電話をしている間、駐車場の中を車が何台も通り過ぎて行く。通り過ぎて行く度に車のライトが少し眩しく感じる。

『…何故、あの場所にシェリーが現れると分かった？』

ジンが発した『あの場所』とは群馬にある神山薬品会社の閉鎖された研究所の事だと彼女は直ぐに分かった。



「偶然よ。あの辺りを通り掛かったらシェリーを見かけたのよ。裏切り者の顔だから見間違える訳ないわ。」  
彼女は淡々とジンに話し出した。

『本当に偶然だろうな？』

ジンは再度、彼女に確認する様に尋ねて来た。

「ええ…、偶然よ偶然。」

『まあ良いだろう…。何かあったらまた報告しろ。』  
ジンはそう言い終えると電話を切った。彼女は電話が切れた事を確認してから携帯をポケットに入れた。

「（そう…、ただの偶然よ。）」  
彼女は駐車場から見える夜空の方に視線を移した。夜空は何処から見ても真っ暗な空だった。夜空に浮かぶ月だけが光りを出している。闇に覆われた世界に月だけが微かに光りを出している。彼女は月を見ながらまた笑みを浮かべた。

「どうやら戻ったみたいだな。」  
翌日、志保は哀の姿に戻った。東京に戻って来た時間が遅かったの  
でコナンは博士の家に泊まった。

「ええ…、お蔭さまで子供の姿に戻ったわ。」  
部屋から出て来た哀は少し眠そうな顔をしている。

「でも、良かったわい。奴等に哀君の正体がばれずに済んで…。」  
博士は哀の事を心配しながらジン達に哀の正体がばれなかった事に  
安心した。

「ああ…、そうだな。」  
コナンは何かを考えながら答えた。コナンが何かを考えている事に  
哀は直ぐに気付いた。

「どうしたの？何か気になる事でもあるの？」

「何故、ジン達はあの建物に現れたんだ？」

コナンは腕を組みながら真剣な眼差しをしている。

「彼等の仲間が私の姿を見つけてその仲間がジンに連絡して彼等があの研究所に現れた…。」

「じゃあ、なんで奴等の仲間はある場所に居たんだ？」

コナンの言葉を聞いて哀は少し疑問を感じた。あの研究所には組織に関する情報はなかった。しかも、あの研究所は閉鎖されて誰も使っていない。そんな場所で彼等の仲間は何をしていたんだろう？哀は何処からか不安を感じた。

「ど、どういう事じゃ新一君？」

「奴等が理由もなくあの辺りに居る訳がない。もし理由があるのなら…。」

コナンは視線を哀の方に向けた。その視線に哀が気付いた。

「そうね…。彼等があそこに居た理由が私を捜す為なら納得は出来るけど…。」

視線に気付いた哀が淡々と答え出した。哀の言葉を聞いて博士の表情は段々と真剣な表情に変わった。

「だが、俺達がああの建物に行く事になったのは偶然だ。奴等が知る事は出来ねえ。」

「じゃあ、奴等は何故あんな場所に…。」

コナンの言葉を聞いてた後、博士が口を開いた。

「わからねえ…。けど、何か嫌な予感がする。」

「嫌な予感？」

コナンが発した言葉が気になり、哀がコナンに尋ねた。

「いや…、なんかそんな感じがしたただけだ。」

コナンは少し間を空けてから答えた。コナンが気にしている『嫌な予感』は何れ当たってしまう。その『嫌な予感』はどんな風にコナン達に迫るのか？闇はコナン達が知らない場所でひそかに迫り出している。追い続ける闇は一步間違えれば闇に飲まれてしまう。闇に捕われない様に光りを照らしながら闇にうごめく組織の謎を求めて…。

く謎を求めて… ・完く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9662h/>

---

謎を求めて…

2010年10月10日12時44分発行